
フェイの賑やか家族観察

L E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェイの賑やか家族観察

【Nコード】

N9018U

【作者名】

LEE

【あらすじ】

遙か未来から来たオレ、フェイ。最悪な事故のせいで過去に来たオレが出会った新しいご主人様は・・・なんと親なし15人暮らし。美人で恐ろしい汐見家の娘たちと、バカで変人の奥野家の娘・息子たちが作る日常は・・・厭きないね、見ていて。女10人、男5人＋人口知能持ちの妖精人形がつくる日常風景。

オレ、フェイ

遙辺町。

都市と比べれば田舎だが、田舎と言えるほどの田舎ではない、ごく普通の町。だんだんと都市らしい建物が増えてはいるものの、自然も残されている町だ。

遙か未来から来た歴代最高の人工知能をもつ妖精人形のオレ、フェイはこの町をのどかだと思った。

『ぶつちやけ俺の時代ってごちゃごちゃすぎだし。・・・まあ、だからって過去に来たくはなかったなあ（泣）』

何でそんなすつごーい人工知能を持つようなオレが、今の時代に来てるかって？

そんなの一言で済む。

『ご主人様の喧嘩に巻き込まれて過去に送られた！！』

オレを無からつくって命を吹き込んでくれたのは、未来で一番有名な技術者。美人で秀才なのに性格が超サディスト。おまけに集中するとオレの存在を忘れる（つまりオレが栄養補給ができなくなつて死線を彷徨う羽目になる）上に睡眠・栄養どころか水分さえとらずに1週間没頭するという超人。疲労も空腹も喉の渇きも普段の生活を1日挟むだけで1週間分カバーできるというびっくり体質。というか、動物としてそれは分類できるのか・・・基本的な欲求が常に危険な研究とサディスティックな実験とか言っている辺り、この世にいて大丈夫かと思う。

しかも、それは生まれつきの体質で、未来の科学技術の助け一切な

し。更に、そんな不健康な生活でも誰もが羨むような容姿を保っている。

ああ、こう述べてと改めて人間離れしていて恐ろしい・・・あの実験の手助けよりももっと恐ろしいかもしれ・・・って、過去に浸ってる場合ではないな。

ご主人様はいつもの如くオレを忘れて作業に没頭していたんだ。ただ、今回はオレの血の滲むような努力のかいあって（嘘です、何もしてません）ご主人様の唯一（ここ重要）の人間の友達（本人は婚約者だと言いつ張っているが）にオレの栄養補給を任してくれていた。ただな、ソイツは救いようがないくらい馬鹿だったんだ。ほぼ毎日ご主人様のところに来ては壊したから直してと頼んでいたくらい物を壊す奴だったんだ。

『ああ！案の定ソイツは壊したよ！オレの充電器！！』

しかも充電切れ一歩手前だ。ご主人様に壊すなって念押しされていたのに1回目で充電器は天に召されたのさ、チクショー！

当たり前にもオレ死線彷徨いながらソイツに運ばれた。ご主人様がそいつを鬱陶しい目で見ながらオレを瞬時に生き返らせてくれた。予備の充電器がつくってあったらしい。絶対壊すと思ってたらしい。良く考えてるぜ、ご主人様。おかげでオレはこうしているのだが・

『あの充電器、。。。万はするんだよね。たしか』

一体それがどれだけ高いか・・・。あつ、もちろんオレ本体のほうが高いよ！？

有名な技術者で世界的にもかなり高い給料もらってるご主人様から見ればそんな対した金額ではないだろうけど。

でも、ご主人様はソイツを思いつきり平手打ちしたのさ。技術者っ

て自分の作ったものに愛着心が少なからずあるんだと思うんだよね。
（・・・サディスト魂じゃないよね？あれ？でも昔好きな人は虐めるのが一番面白いとか言ってた気が・・・）

理由はどうであれ、ご主人様の一撃を喰らったソイツはバランス崩して変なボタン押してしまったようで、ご主人様が叩くときに振り切った手が充電器を自分の体から引っこ抜こうとしていて周りを見てなかったオレの腹にクリーンヒット。人間の大人であるソイツがバランス崩すほどの威力が手のひらサイズのオレにすれば吹っ飛ばさ。ソイツの押したスイッチがタイムマシンで、転送機の真下に俺は吹っ飛んだという二重の不幸で俺はここにいるというわけ。

オレ、フェイ（後書き）

はじめまして、L Eです。

へたっぴですが、楽しんでいただけたら幸いです。

これからどうするか・・・

ご主人様がオレをちよつとやそつとじゃ壊れないよう丈夫に作ってくれている。それにそのご主人様の実験で何度も死線を彷徨っていたから、壊れるということも焦るということもなかったのだが、帰る手段がない。

あのタイムマシンは現在進行型でご主人様が創っている物の失敗作だ。時間を越える際にその物体がどこにいるかが判るような物をつけるだけで完成らしいのだが、まだできそうにないらしい。

実際、オレはこのように過去にきているから、タイムマシン自体は完成品だ。帰る装置も先にできている。過去に失われた書物を取り寄せるためのだけど、それを応用すると言っていた。それを使えば変えれなくても、当たり前前にこの時代にご主人様はいないし、あのバカが押したボタンがどれかなんか判別できないだろう。場所の特定はおそらく困難だ。

ご主人様の事だからきつと履歴なんか寝ぼけてても（寝ぼけること自体ないけど）つけられるだろうけど・・・やっぱり無理だな。

だって・・・オレのコピー（3日後に爆発する時限爆弾つき）が先週、紀元前に飛ばされた方がいいが居場所不明。おそらく爆発してる。帰れる見込みはあのコピー同様0だ。

まあ、俺に爆弾なんてついていないし、幸い携帯充電器は刺さったまま。しかも充電器はで、電気さえ流れていれば直流だろうが交流だろうが、超高压電流だろうが一定値以上の電気が流れているなら端子を突っ込むだけで充電できる。つまり、オレ一人でもできる。だからどっかの家のコンセント、もしくは電池を拝借すればいいのだがすぐにできるとは限らない。こまめにして置くのが無難だろう。そう思っただけは了解してくれそんな人を探したが・・・

『もしかして、この時代の人ってオレの事見えてない？』

俺の身長は約15センチ。ちょっと細身だけど薄い青の結構立派な羽のおかげで存在感はあると思う。人間の顔の前を飛んでいるのに、そのまま気付かずに歩いてぶつかりそうになっている。そのたびにオレが全力で避けているのだ。

これでは連れ帰ってくれる人は見つかりそうもない。泥棒みたくで正直嫌だったが、都合よく開いている窓から侵入するしか方法はな
いようだ。

オレと新・ご主人様

そう思つてオレは開いている窓を探し始めたときだった。

「・・・何だコイツ？」

右足の間接が抜けそうな勢いで引つ張られた。

俺の足を掴んでオレを見ているその人こそがオレの新たなご主人様となる人だった。まだ少年。だが、子供特有の無邪気さはあんまりない。というか目が不機嫌そうで怖い。12〜13歳ぐらいだろうか。

見ようには女の子にも見える顔立ちはまだ若いからだろう。

なかなか話が分かつてくれなさそうだが、オレは未来から来たことと、帰れなくなったこと、栄養補給のために家のコンセントもしくは電池を貸して欲しいことを話した。捕まって見世物にされようが、充電切れれば意味ないことは馬鹿でもわかるだろうから、大丈夫かという気はなかった。というかむしろオレの日常と比べれば平和だ。オレの足を掴むその人はしばらく考え込むように顎に手をやっていたが、すぐに了承した。

「わかった。兄貴と姉貴に見つかるなよ？」

『なんかオレの事皆見えてないみたいだから大丈夫だ・・・それより君、順応性がありすぎる』

「目の前にあるのはいつも現実」

話してて思ったが、普通こういうのは信じないだろ？

というか、すんなりオツケーくるものか！？

まあ、死ぬよりはマシなのでありがたくオレが見えるその新しいご主人様についていった。

「ただいま」

「おかえりい」

「（無視）」

「ひどいよ!!」

『かわいそうだな・・・』

「あんなのは無視しかないだろう」

「待つてよー!!!」

「黙れ」

新しいご主人様と結構似た顔立ちの同年代の男が迎えたのに、相手にしないのに少し同情する。新しいご主人様の後ろにいるオレには気付かない。

そのまま新しいご主人様はオレをコンセントの前に連れてってオレが満足するまで充電させてもらい、その後の話で居候させてもらうことになった。

そんなフェイの、この一家の観察を話そう。

オレの居候しているこの家は

オレのご主人様が住む家は遥部町の商店街の近くの静かな住宅街の外れ、少し開けた場所にある。普通の家の2倍以上の大きさの一軒家。最近建てられたほど新しくはなく、かといって何十年も前からあるような古さはなく、せいぜい十数年位であろう二階建ての家。金持ちの住みそうな大きさだが、外装に凝った様子はない。大きさ以外は極々普通の家だ。

目覚まし時計同様正確に、朝早くから少しづつ声が大きくなる賑やかな家。近所迷惑一步手前のような毎日は近所から楽しそうと優しく見守られている。

新しいご主人様は学生のため、学校に行っている間、オレは留守番。家事の音が微かに聞こえる平日の真昼、家はかなり静かになる。

夕方、朝よりもゆっくりと賑やかさを取り戻し、夜もまた楽しそうな声が聞こえるこの家。

この家の本当の主は不在である。そしてその妻も不在である。

その2人の親友であり、もはや家族同然の中になった幼馴染・・・ご主人様の両親である夫妻も不在である。

子を養うために共働きをしている4人は昼どころか夜も帰ってこない。

仕事柄、世界中を飛び回っているために家を空けるのが普通になってから既に7年は経っていると新しいご主人様は言っていた。

4人は家の事をほぼ全て、99%以上を娘や息子に任せている。

この家には汐見家の娘8人と、奥野家の娘2人と息子5人の総勢15人という賑やかな人達が住んでいた。

絶対服従の義姉2人と元女番長の実姉

本日、過ごしやすい秋晴れ。半袖でも長袖でも大丈夫そうな日である。

今日をみんなにこの家の一日の例として教えよう。

『理由？・・・旧ご主人様の実験に手を貸すという恐ろしい夢を見てしまつて怖くて眠れないんだ！』

得体の知れない機械の実験台なんて誰だつてやりたくないだろう！？それはさておき、もう寝れない俺はこの家一番の早起き娘のいる部屋へと向かつていった。

都合よくドアは開いていたため、何の苦もなく入れた。

既に人影が動いていた。

「起きろー！ー！！」

親の代わりを務めている、兄弟の中でも最年長の汐見家長女のかんなだ。

はつらつとした笑顔が浮かぶ明るい顔。肩にかからないほどの長さで適度に切りそろえ、小さく二つに結わえた髪とアホ毛がさらに元氣らしさと若さを象徴している。

今年で21となる彼女は兄弟の中でも一番厳しいしつけを受けて真面目な人柄へと育っているようで、いつもこの家の中心にいる。学力にも恵まれており、大学のトップの座に居続けている事も聞いている。家事もこなすために体力もつき、文武両道の天才。普段は優しい人柄だが、本気で怒らせると恐ろしい程にたくさんのお仕置きが待っている為に弟妹たちは絶対服従せざるを得ない。既にその様子を見た他所の何人かはその様子がトラウマになっている様が、な

なんとなく旧ご主人様を思い出す。

かんなの最初の仕事は同部屋の2人を起こすことだ。

ベッドを降りて布団を引つpegすと、場所がないと幼い頃から使っている少し小さな3段ベッドの中央で寝ているさやかが身体を起こす。一番下のベッドで寝ている有紗は布団の上で寝返りを数回しながら目をこする。

「んゝゝゝ起きるゝ」

「ダルーイゝゝゝ」

「ダルクても起きる！バイトなんですよ」

汐見家、次女のさやかは要領良しの裏情報通。

セミロングの綺麗な黒髪に細涪の黒い眼鏡をかけた美人。真つ白なカチューシャを頭につけ、おとなしげなイメージを放っている。白衣を着れば旧ご主人様が完成しそうだ。

今年20歳を迎える彼女は姉のかんなが厳しくしつけられる様を見ていたからか要領良しに育っている。でも基本は真面目でちよつとサディストっぽい性格。黒い笑顔まで綺麗な人だ。今は通信制の専門教育を受けながら家の事をかんなと共に担っている。人脈が広く、その外見とは裏腹に危険な情報の数々を手にする為に時に姉のかんな相手に主導権を奪うことも度々目撃した。裏情報の多くは弟妹たちにとって恐ろしい武器になっている。その為、姉同様絶対服従であるようだ。

奥野家の長女の有紗は元不良。

必要最低限の手入れをしているだけの茶髪はベリーショートにカットしている彼女には不良の風格が今もなお顕在している。

番長という肩書きも手に入れていた為に弟妹の同級生からのいじめ（ご主人様には無縁だったらしい）をその存在で遠ざけていたようだ。学問には難があるが、体力と体術は成人男性以上で、弟たちの殴り合いを止めるのはもっぱらこの人。汐見家の2人に劣等感を抱

いて幼少の頃から素行の悪さが目立っていたが19になって改心、アルバイトに没頭した。ただし、改心しても性格が少々酷く、接客業は不向きな為に低賃金な日雇いの土木業。その収入の大部分を家のために使っているという感心な人だ。

まだ暗い朝のうちから3人の仕事は始まる。かなと有紗は朝食作りのために2階の寝室を出て1階へと降りる。さやかは隣の部屋で寝ている妹たちを起こしにいく。

超美人の双子義姉

3人の部屋より少し小さい部屋には2人の妹が寝ている。

・・・女性の寝起きを見るのってこの時代では犯罪かなあ？（ちなみに、オレの時代は犯罪ではない）でも、早くに目が覚めちゃったし・・・（AM5:00）

「2人とも起きて〜」

「う・・・おはよう姉さん」

「・・・朝かあ」

比較的寝起きのいい2人は軽く揺すればすぐに目を覚ますので、1人ずつ起こしたらさやかは階下の2人に合流する。

さやかと言った後は2人は向かい合って丁寧な挨拶を交わすのはもはや毎朝の習慣のようだ。

「おはよう、きりか」

「おはよう、みさき」

汐見家の三女と四女は一卵性双子の姉妹であるきりかとみさきは鏡に映ったように似ている。というか、3年見ているがきりかとみさきをよく間違える。

2人とも緩いカールのある癖毛をツインテールにして、赤い眼鏡をかけている。赤の他人は当たり前、兄弟姉妹もたまに間違えるくらいに似ている。声も体型もそっくりで、唯一の違いが、前髪の分け方が弱冠違う——右目上でわけるのがきりか、ほぼ中央（髪の毛の生え方が原因で少し右寄りになってしまったためわかりにくい）で分けるのがみさき——だけである。

姉にあたるのはきりかで、みさきは妹にあたる。かわいらしいルツ

クスと優しい性格を持つて生まれた2人は仲が良く、一番まともな愛を受けて育ったようでオレの心の癒しキャラである。姉に迷惑は滅多にかけず、妹や弟の面倒見もいいと、ほとんど非の打ち所がないうえ、この家の中で一番常識のある2人でもある。今年18になるの2人は兄弟姉妹の中ではあたりまえに信頼が高い。もちろんちよつと捻くれているご主人様も大好きなお義姉さんだ。

きりかは更に隣の部屋の妹を、みさきは1階で寝ている妹を起こしに部屋を出る。そのなんでもない普通の姿さえも綺麗で目の保養になる・・・（癒）

ご主人様と相部屋の義妹

きりかは女の子にしては少し散らかっている部屋を大またで歩くと2段ベッドの上をのぞく。

「ななこ」

「ん・・・おはよ、きり姉」

きりかが起こすのは実妹のななこだけで、一緒の部屋で寝ているオレのご主人様である義妹の結城は無視する。ご主人様は超がつくほど寝起きが悪く、かなり苦勞するからであって、義妹だからという理由はないと断言できる。それだけきりかは信賴があるってことだ。そしてななこを起こすときりかは一番苦戦するであろう1階に行つたみさきの手伝いに行く。

汐見家五女のななこは弱冠ドジだが周りを考える優しい子だ。

かななが小さくなったかのようにかななそっくりのルックスの持ち主である。そのうえかななと同じような髪型にしているため、かな度が更に上がっている。

今年受験生の15歳。元から学問に優れているためにまだ家事を手伝う余裕があるのだが、かなり大雑把でドジなところもある困ったちゃんでもある。さらにかんなが怒ったときと同じようにに少々きつい性格も見え隠れするが、姉の手伝いや妹限定で勉強を教えたりと根は優しい女の子である。そこが旧ご主人様とは全然違う。旧ご主人様なら酷いことしそうだ。

ななこはベッドの上で大きく伸びをすると下で眠っているご主人様をのぞく。

いつもご主人様は端っこに寄って布団に包まって丸くなっている。夏でも必ずタオルケットに包まっているけど・・・暑くないのかと思う。今は寒いからちょうどいいだろうけど・・・猫みたいだ。

「起きて〜」

「・・・ねみい」

「遅刻するよ」

「勉強時間削ればいい」

「かんな姉ちゃんに怒られるよ」

「・・・チツ、起きればいいんだろお」

ぶつくさ文句言いながらも、ちゃんと起きる。夜型+寝起き最悪というご主人様を苦もなく起こすと、ななこは部屋を出ていった。

オレのご主人様

奥野家次女であるご主人様は男の子らしい言動と行動が多い。というかここに来てすぐ、なんとなくで風呂について行って女だったときはびっくりした。

シャツ脱いでその下にあるものを脳が認識したのはすごく遅かった。女の子だったとはね（一瞬変態かと思ったのは絶対内緒だ）……初対面ではオレ、「少年」と思ってたし。

長いと邪魔だと男の子のような髪型にしている彼女は、生まれつきらしい中性的な顔立ちな為に思ったとおり何度も性別を間違われて（……ホント申し訳ない）は兄弟に実は男なんじゃと疑われている。そのせいではない（と思う）がいつも目が少し不機嫌そうに歪んでいる。

姉を基本的に苦手として男兄弟に囲まれて育ったうえに、実姉であった有紗に少々（かなり）影響された性格だが、学問はななこ以上である。危険思考で自分で異端だとわかっているようで家の外では多少猫かぶり状態になるが家の中では遠慮がない。男子度マックスでかなり酷く、15になるがまだこの家の中で一番女の自覚がない。というか女の子だなぁって思える行動がこの3年で何回あったことやら……たぶん片手で事足りるだろう。下手すればない。

例えば……

？男兄弟と殴り合い（相手はとりあえずは女の子だっけわかってるから顔とか胸とかに気を使ってて本気で殴れないのに手加減しないで本気で急所や鳩尾に打撃を打ち込む）

？男友達と兄弟に女一人混じって遊びに行く（しかも剣だの斧だの銃だの出てくる派手なアクションゲームで休日一日遊びつくしたこともあった）

？女の子の話についていけない（「今の。。君かっこいいね」や「昨日のTVででてた。。の服、超かわいかった」等は首を傾げ

るしかない)

？女の子のファンシー小物は可愛いと思ってもちたいとは微塵も
思わない(露骨に嫌そうな顔して拒絶する)
などなど。

また、ご主人様には異性の興味はないらしい。

・恋愛感情って何と真顔で言える(きりかの証言)

・男の子相手にも普通に同姓と見ているのではないかというように
接し方(さやかか証言)

・兄弟はともかく同級生の裸を見ても何の反応もないうえ、自分の
下着とか見えちゃっても顔色変えないし、のんびりとしか直さない
(ななこの証言)

・兄の部屋のマズイ物にも無反応。一瞥して終了する(かんなの証
言)

・・・・最初の2つはともかく後の2つはどうかと思うよご主人様。
でもそんなこといったら痛い目に会うのは目に見え・・・最近ご
主人様はやめるとデコピンされたのを思い出した。

最近旧ご主人様の実験がないおかげで痛い思いをしなかったからか、
男並みの力を持っているからか、かなりの激痛だった。

ご主人様と呼ぶのは当たり前だったのだが、あんな痛い思いはした
くない。普通に結城と呼ぼう。3年も経ってしまってから何をいま
さらとは思っただけど・・・友達としてオレの事を見てくれるなら
それでもいいかなと思う。

そんなご主・・・結城にとっても、かんなの権力はかなり効くのは
確かだ。2度寝しないでちゃんと起きている。

素行最悪問題児の実弟

結城は頬を叩いて目を完全に覚まさせると向かいの部屋へと入る。

「起きろ」

雑然とした男部屋の片隅においてある目覚まし時計を手にとって、音を無理矢理に鳴らす。毎日起きるまで目覚ましは鳴らしっぱなしだ。

いつもこのときは寝ている2人に同情する。もつと優しく起こしてあげればいいのに・・・まあ、結城の性格では無理だろう。旧主人様も性格を直すことは無理だと断言するし。

「だあああ！！毎朝うるせえ！！」

うるさい中、2段ベッドの下で寝ていた五男の隆星が起きる。

素行最悪の隆星は奥野家の五男であり末っ子。

少年漫画のようなトゲトゲ頭。あれで天然物なのがすごい。軽く尊敬物の髪型だ。濡れた時は萎れた様になる。まだ顔立ちには幼さが残り、好奇心旺盛そうな悪戯鬼そのまんまであるが、よく見れば結構可愛い顔をしている。

今年中学に入学したが、既に先生にも見放されているらしい。とりあえずなんとかやっていけていますというようかなり危うい状態で、義姉とも実姉ともかなり喧嘩が多い上、兄達も手を焼くほどうるさい。学問は平均やや下、運動は天才級で同性好きの異端者。

喧嘩っ早いために実姉である結城と朝から喧嘩勃発なんて当たり前。

「普通に起こせよ！！」

「隆も秋も普通に起こしたって起きねえだろ。秋、起きろ」

毎度同じ喧嘩は軽くスルーして上で寝ている秋光を起こすために上のベッドをのぞく。

同時にオレは秋光の顔のほうへ移動する。なんか秋光はオレをこの時代に飛ばした原因の一人に雰囲気と髪の色だけはそっくりだから無性に虐めたくなる。結城の手伝いもかねて一発だけ頬を殴ろう（オレの力じゃか弱い女の子より雑魚らしいが・・・）として、気付いた。

双子の弟は超変人

オレは気づいた。秋光が布団の中で怪しい笑みを浮かべてる。

『逃げ・・・』

「兄弟相手に夜這い（嬉々）？」

結論・・・正真正銘こいつは朝から頭のイッちゃった変人だ。関わるのが間違い。

朝から変態思考。それに相手は（悪いけど）お世辞にも魅力的とはいえない結城だ。・・・本人には絶対言えないけど。

「（無視）起きてるな、じゃあ兄貴のどこだ」

流石秋光の兄弟というべきか。それともそういうのに興味がないからか。適切に回避できている。

そういえば初めて見たときも無視されていたな。毎度無視されているのに懲りないのも見上げた根性だと思う。

変人の秋光は奥野家四男にあたる。正直結城にこんな兄弟がいるなんて認めたくない。

全体のバランスは結城とそっくりだが髪型は結城と前髪が少し違って長く、髪の色も秋光のほうが茶色っぽい。また、目は結城とは逆にいつも笑みの形に歪められている。

二卵性双子で結城がとりあえず姉。協調性はそこそこある自由人だが、同性好き（基本女の子に興味を欠片も持たない）の変人。隆星も同じく同性好きな為によく意気投合している。が、実の姉弟である（結城を男だと信じているからかはわからないが）結城の事は例外に大好きで、毎日いろいろ仕掛けているものの、全て無視されている。それ以外の基本的な常識は必要最低限は持っている。年相応

の事をやるが、学力は結城と違ってかなり低い。

その為か、こいつを見てるとほんとにあの馬鹿のことを思い出す。もう3年経つのに鮮明に覚えてるのはきつと秋光のせい。だって、旧ご主人様にいろいろやつても全て無視されるか邪険にされてたから。

秋光を無視して結城は部屋を出る。その後を2人がちゃんとついていくのは朝の楽しみのためだ。もちろん、オレも羽根を懸命に羽ばたかせて廊下を走る3人についていく。

2人の部屋と階段を挟んで隣の部屋。そこには3人の兄が寝ている。半開きだったドアを隆星が蹴り開け、今朝一番の大声を上げる。

「マゾ兄っ！！朝だぞっ！！！」

「バカ兄、起きて」

「ウザ兄、3秒以内に起きろ」

布団に入ってしまったえば3秒で寝て、朝まで起きないという眠りの深さ+寝起きの悪いという睡眠欲求が多い奥野家の兄が起きる訳がないということはもちろん知っている3人は各役割を果たすために動く。

今日はベッドの階段を秋光が上って上、結城がその下、床に直に敷いてある布団を隆星が覗く。

「和兄。お・き・て」

「翔兄、本気で殴って起こしていいか？」

「恭兄、俺もやっていい？」

朝兄3人のテンションが低いのはこのせいだ。気色悪いか、恐ろしいか、気味が悪いかのどれかだ。

バカとシスコンとエロの実兄3人組

オレがこういう風に起こされるようになったら眠れなくなる。それでも寝れる3人をちよっぴり尊敬する。……でもやっぱり毎日毎日この光景は可哀そうだ。

「バカ言うな、そして裏声を使うな、気味が悪い」

秋光の頭を遠ざけながら起きたのは奥野家長男の和茂だ。

年相応なスポーツ刈りの黒髪と少々吊り目以外はたいした特徴のない普通の人。隆星は和茂の中学生時代と髪型以外はそっくりである。古いアルバムを家族で囲んでたのを覗き見た時はあまりに似すぎて結城の肩の上で爆笑して怒られた。

きりかとみさきと同じ18歳。ヘタレにバカという悲しい称号を手にかけているが、ここ一番というときはビシッと決めてくれる上に信用できる。弟妹や姉どころか義姉や義妹たちにも酷い扱いをされやすいが、信頼は厚い。肉体派で体力は自身あるも、学問は秋光同レベルとかなりできないのだが奇跡的に運良く受験に合格して、きりかとみさきと同じ高校にいる。

「馬鹿なのは合ってるよ、和兄さん。結、朝から物騒な話をしないで」

結城の右腕を注視しながら起きるのは奥野家の次男、翔平。

教室の隅でじっと読書に耽るような大人しげな雰囲気。柔らかな髪が顔の周りを覆っているが、頭のとっぺんにアホ毛が小さくある。影が薄そうな風貌の小柄の男子。

表向きは真面目な高校2年男子として和茂と同じ高校に通っているようだ、家にいるときの本当の翔平は極度のシスコンで、うざが

られている。弟には面白いからと黒いことしかやらず、唯一の兄和茂には弟たち以上に真つ黒な笑みを見せ続けるという歪んだ性格も持っている。逆に姉には頭が上がらない。体力・学力、共に平均の凡人。

「ふわあゝ・・・隆、お前が言うとは別の意味にも取れるからやめてくれ」

欠伸まじりに苦笑したのは奥野家三男、恭助。

男のくせに奥野家で一番髪が長い。丸顔で大きさの違うアホ毛が同じところから出ていることからトマトのあだ名があり、よく呼ばれる。垂れ目なことを除けば全体的に翔平に似ている。しかし翔平以上に影が薄そうな顔立ちだ。

今年兄達と同じ高校に入学した16歳。秋光・和茂と同格の成績なもの、人が良い。・・・というのが表書きで、裏はただの工口野郎で何度も女姉妹に怒られているが、まったく懲りない。超マゾな性格もあってか、和茂と2人で弟2人の同性好きの餌食になりやすい。しょっちゅう妄想や思い出し笑いをしていて、できれば一番見たくない人。

「ククツ」「」

3人の文句は無視して笑っている弟妹3人。毎日、必ずと言っていいほど兄3人は寝癖が酷い。・・・和茂なんか、良くできるよなっと思うくらい短いのに、わずかに長い前髪があっちこっち向いていて・・・ククツツ。

結城たちはさつさと部屋を出ると、1階へと足音大きく降りていく。二度寝は簡単にできるだろうが、そうしては義姉であるかんなに怒られる上に、朝食は全て食べ盛りの奴らに盗られるだろう。かといつて新しく自分たちで作ろうとすれば、面倒な家事をついでにと押

し付けられるというのがオレでもわかるのだから、和茂達もわかっているだろう。

逆らわずにちゃんと起きるのが利口な手であつた。

のそのそと起きて着替え始めた3人の部屋をオレは早急に退散した。男の着替えに興味はない。女の着替えを見るのもどうかと思うがな。たぶん結城はトイレだ洗顔だといろいろしているだろう。

暇な俺は1階にいる究極の癒し娘を見に階段の手すりを滑り台代わりにして降りていった。

性格正反対の双子義妹と薄幸な末っ子義妹

かなり前に降りていったはずのみさきが妹相手に今だ奮闘中。

「ちなみ、起きて！るりこ、起きたのなら手伝って」

「んゝ・・・きり姉さんおはよう」

「みさき姉さんだし。寝ぼけてるでしょ」

寝ぼけているのは汐見家七女にあたるちなみ。オレの究極の癒し娘。緩い天然パーマと開いているのか開いていないか判別ができないほどの細目が特徴的な彼女。小顔な上に顔のパーツも小さい。でも雰囲気は汐見家の皆と同じだ。

天然おバカで一番の天才頭脳の持ち主という不思議ちゃん。今年中2になったちなみは全国模試で満点トップ、漢・英・数検全て1級1発合格。しかも勉強は過去問を1回。練習問題は解かず、例題を見ただけともはや勉強の神。実技も体育以外は得意。普段から優しく慈愛に満ちており、姉たちに大人気。発育もいため、エロ恭助の一番の被害者になっている。正直、新しいご主人様はこの子がよかった。

そんなちなみに修正を加えるのは六女のるりこ。

ちなみとは二卵性双子らしい。そのためかほとんど似ておらず、るりこはさやかが髪を伸ばしただけのような風貌である。ただ、カチューシャはつけずに後ろで2つに結わえている為に、旧ご主人様とはかけ離れている。

学問に誰もがうらやむほど優れているちなみに劣等感を抱きながらも優しすぎるちなみを守る為に腹黒くなったというのはここ3年で痛いほどよくわかった。それ以上の間一緒にいる姉たちは当たり前前にそれをわかつていたため何も文句を言わないが、しばしば義兄や結城や妹と喧嘩になることがある。ルックスは姉に似て良いが、学

問・運動は共に平均やや下である。が、喧嘩になると異様に強い。

「大丈夫？起きて」

手伝いに来ていたきりかは末っ子のあんずのところに。

いつもなかなか起きないあんずは今日も当たり前のように爆睡中である。いつも一番最初に寝てしまうくせにいつも一番最後に起きるという超睡眠欲求の高い子だ。・・・赤子か？と思うほどにいつまで経っても毎度毎度手こずるため正直きりかもみさきもまいっている。

今年中学に就学したあんず。

かなり特徴的なのはその長い前髪。胸の辺りまで伸ばした前髪を左目が出る位置で2本のピンで留めている。行いとほぼ同等の幼い顔立ちの半分を前髪で覆い、後ろ髪や耳周りの髪もそのままおろした状態のおそらくこの家の女の子で一番特徴的な髪型。

運動も勉強もその他の事でも一番才能に恵まれなかった上、他の弟妹達で手一杯になっていた姉達になかなか構って貰えなかった可哀そうな子である。隆星同様に見捨てられかけているが、本人はめげずに毎日頑張っている。それがおそらく彼女の長所なのだろう。極度の男好きだが、義兄達は論外、毛嫌いして毎日罵声を浴びせるが返り討ちに遭ってよく泣かされるという・・・自業自得のような人だ。

あんずは揺すっても頬を叩いても起きない。普通の方法はほとんど使えない。いろいろな方法で起こしているが、3日ほどで耐性がついてしまうようで、いつも皆苦労しているようだ。

汐見家の娘たちの朝食風景

あんずを起こすために姉たちは大奮闘中……。

「さて……今日はどうやろうか」

「くすぐり、効くかな？」

「鼻つまんでみようよ」

「それ最近やったよ。きり姉」

「枕抜きまーす！」

「みさき姉、どいて」

今まさにみさきが枕を掴もうとした瞬間、るりこが静止を呼びかけた。

そしてあんずの長い前髪をわしづかみにすると、思い切り引つ張った。

「いったあああい!!」

「（無視）さあ、ご飯だよ」

朝から絶叫する妹を無視して全員が部屋を出て、かなり広いリビングへ出る。オレもその後ろをついていくと既にご飯と味噌汁とが暖かい湯気を出しながら待っていた。おかずは魚の切り身。麦茶もちやんと出してある。おいしそうだけど、俺の分は当たり前じゃないし、必要ない。

既にさやかとかんとななこは席についている。空いている席に適当にきりか達5人が座ると、朝食が始まった。

有紗は作りながら軽く食べており、既にバイトの準備をしていた。男共と結城は席が足りないのとおかず戦争をするという理由から後で食べる。今は何も置いていない部屋の中央で床を机に宿題を必死

でやっている。いつも思うのはいくらこの10分で解けるからと結城が昨日の夜放っておいたものをバカな秋光が同じ時間でやり終えようとするのか・・・それでも終わらせられているのは奇跡だと思う。

切羽詰りながら宿題を進める男どもと結城を横目に有紗は荷物を持って立ち上がる。

「おねえちゃん、7時ぐらいに帰るから家事よろしくね」

家計を親の仕送りで賄ってはいるものの、急な出費や個人のお小遣い用のお金は残らない。その分を稼ぐのも家事も支えているのは高校を出た3人である。できる人ができるだけやるのがこの家のルール。

「了解・・・あつ、今日までのレポート・・・（冷汗）」

「姉さん、まさかの白紙とか」

「一日くらい大丈夫なんじゃない？」

「そうもいかないの、成績優秀で通しておいてるから」

「そういうの、隆や秋も見習って欲しいわね」

「確かにそうだね。いつもあれらの勉強に关心のなさには呆れる」

「あんな風にいつも一生懸命やってくれば・・・普段のは酷い」

「秋兄の勉強はなな姉が教えてるしね」

「隆はちなみが教えてくれるから何とかなってるけど秋はねえ・・・

（溜息）」

「のみこみが悪すぎて困るよ・・・そのうち秋は隆と同じになるんじゃないかな？」

「大変だね」

「一番あんずの世話が大変だよ」

「ごめんなさい」

「・・・で？姉さんどうするの」

「向こうで即行書き上げる！今日は無理だから、るりことちなみ、お願いね」

この家の中心人物となる彼女らは毎日の食事と洗濯だけは絶対欠かさない。もちろん、毎日は無理な為に安心できるりこやちなみに頼んでやってもらうこともあるが、やっぱりすごい。協力する気持ちが半端ない。できればその一部を旧ご主人様に分け与えてもらいたい。

「たまには俺行くよ」

もちろん、その協力性が男の中に欠片もないわけでもない。年齢的なこともあるからか協力的なほうである和茂が名乗りを上げる。

「和兄は受験勉強」

しかし一蹴。

受験生＋大馬鹿野郎には家事の代わりに勉強が待っている。もちろん、決して馬鹿ではないがきりかとみさきも受験の事のみで家事がパスされる。普段はやらない結城と秋光にもやらなくていい大義名分ができており、ななこも自分でやるとは言わなくなる。ただ、ななこは手伝うと言うことで姉を困らせないためでもあるように思える。

もし、子供ができたなら優しい汐見家の娘たちがいいなあ・・・。

汐見家の朝食後は奥野家の戦争

「姉さんたちと同じところに受かるかなあ」

「きり姉もみさき姉も大丈夫だよ」

「ななこも楽勝でしょ？」

「まあね。さつきちなみが言った通り、今は秋の勉強教えてるし」

「私達も和の勉強教えなきゃならないからそれで時間とっちゃうんだよね」

「汐見家は成績優秀で通ってるのになあ（苦笑）」

「結はななこ以上だけどね」

「くやしいけど。秋と隆の脳細胞奪って生まれたんじゃない？の癖に勉強教えないんだから！！」

「結は記憶と計算で、説明とか記述はななこの方が上手でしょ？」

「まあね。面倒事になったけど、馬鹿秋のせいで！！」

「お疲れ様。でも、教えながら確認できるからマイナスでもないでしょう？ごちそうさま」

「早く食べてね」

「片付けるのは私たちなんだから」

「お義兄ちゃんたちの皿運んであげて」

普通に会話しながら朝食を食べる可愛い汐見家の娘たち。

かなたとさやかか食べ終わると、次々と妹たちが食べ終えて席を立つ。自分の使った食器をバケツリレー方式で渡していき、代わりに新しく料理の盛られた食器が並べられる。

「あつ、るり姉！それまだ食べてないよっ！」

「あんず、どけ。もう俺等食べる時間なくなんだろ」

一人、食べるのがトロイあんずはまだ食べているにもかかわらず隆

星に席を追い出され、わらわらと男＋結城の奥野家が代わりに席に着く。オレは結城の食卓を挟んだ向かい、中央に座る。もちろんオレは一切食事には手をつけない。電気が栄養だからな。

このとき、つまみ食いしようとするものはいない。朝食つまみ食い「朝食抜きだからだ。ちなみに、手伝いの最中のつまみ食いは許されているらしい。結城曰く、手伝いの褒美として、だそうだ。

「いただきます」

全員が箸を手を持った瞬間におかず戦争は始まる。

おそらく戦争中が一日で一番真剣

お互いが何気ない話をしながら人の気を引き、他の奴におかずを奪わせ、他の奴のを奪う手伝いをしてもらう。急造の連携や相手の隙を窺う独自の技を皆編み出している。協力したり、裏切ったり、すごいときには目だけで会話してるんじゃないかって言うのもある。そして今日も。

「別に息抜き代わりにいくつもりだったんだぜ（溜息）」

「息抜きなら明日あるよ、和兄」

「兄さんも秋も馬鹿なんだから今日は明日の分まで勉強するべき」

「凡人の翔兄も人の事言えないだろ（黒笑）、成績落ちてるんだって？」

「珍しく翔兄に黒発言しながら俺の茶を飲むなよ。せっかく和兄の奪ったのに」

「あつ、テメツやりやがったな」

『結城、お茶が狙われてる』

「秋、その手をどけろ」

オレが結城のものを見張っておくのがいつもの約束。ご主人様に使えているのだからこのくらい当たり前。ちよつと反則的かもしれないが、役に立てるのならばやる。

「いつもよく気付くよね。恭兄のは和兄のも一緒にさつき隆が全部飲んだのにまだ気付いてないし」

『それはオレが見てるからです』

「ちゃんと（フェイが）見張ってるから」

「お茶ぐらいいいだろ・・・って俺の魚が小せえ！」

「ん、恭兄の狙ってたときに翔兄に盗ってもらった。その分今

度返すよ、翔兄」

和茂の話題に乗った秋光に注意していた和茂は何時の間にか恭助にすり替えられていた。そして一口飲んでさりげなく反対側へ置いたのだが、隆星に飲まれていた。

隙を作った隆星の切り身は半分ほど左隣に座っていた翔平に盗られて秋光にまわっていたが……。

「あつ、俺の味噌汁……！」

「それはこっち、翔兄とアイ・コンタクトしてる隙にごちそうさま」
」

「代わりにお前の飯よこせ！さっき茶は奪えなかったし！」

「んじゃ、あげるよ。秋……これで隆にアーンしてもらえ（極上の黒笑）」

結城の笑みに皆が氣をとられている間に和茂が何かを探っているのが見えた。恭助の茶碗を空になった自分のとすり替えながら片手でカメラを取り出している。

「……無理。むこうで和兄がなんでカメラ構えてるし（泣）」

「ええ〜やってやるのにい」

「ふん、じゃあやらねえ。ごちそうさま」

『結城、もしかして和茂とグル？』

「まあね。今日もいっぱい食べれたし」

「……！ 氣がついたらご飯盗られてるし！」

「恭から奪った奴？食べといたよ、ごちそうさま」

「翔と結は相変わらずだな」

いつも翔平と結城が大量の収穫を得る。逆に盗られるのは恭助と和茂だ。隆星と秋光は半々と今回もいつも通りの結果だった。

というか、強い結城と組んでるのに被害者になる和茂って・・・。

非受験生は朝練へ

そんなこんなで賑やかな朝食というイベントが終わるのは当たり前
に遅い。

いい加減出発しなければ朝練に遅刻しかねないのはるりこ・ちなみ・
あんず・隆星。

徒歩30分、ちなみやあんずの足で40分。全員が同じ部活と絶対
賑やか過ぎて学校側は傍迷惑な選び方だ。ちなみにかんなや和茂達
兄妹も全員が同じ部活を選んでいたらしい。

汐見家の妹達は同じテニス部を選ぶのがルールとなっていて、全員
がちやんと守っている。理由は出かけるタイミングがバラバラだと
困るだろうという姉思いの妹達。ああ、だからこんなに可愛いんだ
(違うとは言わせない!!)

有紗はなんとなくらしい。和茂・翔平・恭助は汐見家の上が全員入
ったから空気を読んでというオレでもそうしそうなリズムだったか
らだと隆星達に愚痴をこぼしていた。結城は兄への嫌がらせと姉の
文句の嵐から逃れるため。秋光と隆星はただ兄にべたつきただけ
である。

みんなそれなりに強いらしい。愚痴こぼしてた和茂達もなんだかん
だ言って真面目に練習してたのか素質があったのか、地区内トップ
レベルで県大会には出たらしい。かんななんかは全国レベルという
家事しながらで練習を休みがちだったのにこれでは毎日やってたら
どうなるのだという結果を残して引退したと聞いている。結城は県
大一步手前で県内トップに当たって負けてしまっていた。

自転車の許可は下りるものの、数がないために中学生4人は40分
かけて学校へ行く。隆星とあんずがいるからおそらく、もつと時間
がかかっているんだろうけど。

「いつてきまーす」

「いってきます」

「早く出る、あんず」

「隆、うるさい」

毎日毎日呆れるくらいワンパターンの喧嘩をしている。

通学途中に喧嘩して事故にあわないか毎朝非常に心配だ。

それから15分ほどすると、翔平と恭助も出る。こちらは自転車で行く。中学以上に遠い上に、部活が終わるのもかなり遅い。いまだにテニスを続けているのは楽しいと思っているわけであって、道具代の無駄だといつかん私たちの恐怖ではないと願いたい。

「いってきます」

「いってくる」

先ほどの喧嘩に比べればごく普通に家を出ていく。

高確率で恭助が鍵忘れたとまたドアを開けるか、翔平が（わざと？）

恭助の自転車にぶつける音がするが、今日は何も起こらなかった。

受験生は朝の受験勉強

その後は受験組みが30分ほど邪魔者のいない（オレも声をかけることができない）勉強会を始める。

その間にかんたとさやかは家事、学校の準備だ。

「・・・？」

「・・・！！」

「・・・？・・・！！」

「・・・ZZ」

「・・・！！」

「・・・（無心）」

かなり静かなために寝る馬鹿がいるときも多い。しかし、全員が無視。下手すれば気付いていない。

悪戦苦闘している和茂の隣で涎をたらして寝ている秋光の頭を狙ってかんなが洗濯物の入った重たいかごを落とすのはそう遠くないだろう。

きりかとみさき、ななこは和茂の倍近いスピードで問題を解き続けている。結城はそこそこ成績のいいななと同じ問題を先ほどからペンが止まることなく、無心に問題を解いていた。おそらく俺の存在など忘れている。

静かな集中のときがしばらく続く。オレは結城の問題集を邪魔にならない位置からのぞいている。今日は数学のようだ。

旧ご主人様の人工知能で俺の脳はできてからこれくらいの問題はできる。けど、コンピューターに少し劣る程度の速さで答えが俺は出るのに、結城はそれから遅れること2〜3秒とかなり早い。けど、凡ミスが多い。

結城の計算技術に驚いているとその時がやってきた。

近くであわただしく家事をしている音がやみ、力強い足音がこちらへと猛スピードで近づいてきた。

「ソーレッ」

男兄弟の洗濯物が山盛りに入った小さめの洗濯籠が秋光の頭の上に落下した。ただでさえ量が多いのに洗濯を終えたばかりの水分たっぷり、重量抜群の鈍器と貸した洗濯籠は出血しない程度（もっと手加減をしてあげたほうがいいのでは・・・）にかなな支えている。それでも、充分な威力だ。

しかし、頭に落とされたかごが持ち上げられても秋光は動かなかった。

『ついに死んだ・・・？』

「姉さん、いつか秋の記憶が全部飛んじやうんじゃ？」

「馬鹿は死んでも治らないからね。叩いてマシなほうへと治ってもらうしかないでしょ」

「そうだな、同性好きだけはなおしてほしいな。そこだけは女に生まれてよかったと思う」

『だったら女の子らしく・・・』

「結、うちの男は馬鹿しかいないから。これ以上増えると困る（溜息）」

「だけど正直男のほうが楽だろ」

みさきが軽く呆れるだけで、他の奴等は無視。そのまま筆記用具を置いて話を続ける。そろそろ学校へ行く時間が近いために休憩としている。かななも鬼ではない。これから学校で更に勉強するためにそれを無言で許す。旧ご主人様も時折ちゃんと人の優しさがあったなあ・・・

「男なら馬鹿でもなんとかなるとこはなるし。でも、秋と隆に好か
れたいとは思わないから」

溜息まじりに苦笑した結城に皆が真顔で頷く。

ああ、何でオレはココで嫌な予感に気づかなかったんだろう。

変人Ⅱ変態Ⅱ双子の実弟

後悔のときが来る。

突然奴は言った。

「俺的には結でもイケるけど？」

秋光がムクリと起きると笑って結城にウィンクして見せた。

「……キモッ!!」「……」

「俺さあ……キツイ事言われるのとか好きだからさ」俺ってマゾかな? (照)」

「(鳥肌総立ち)マジで死ねや。……抱きつくなあぁ!! (絶叫)」

「いいじゃん」(照々)」

「(照々)(てれてん)じゃねえええ!! 離れろ!!」

『そうだ! 結城から離れる変態め!!』

秋光の目が、これ以上ないくらいに本気だった。絶対に聞きたくない発言に全員が後ずさる。

それでも笑みを浮かべたままの秋光に冷酷に放たれた結城の言葉にもめげずに抱きつく始末。兄弟ということを目を瞑ろうとすれば・

・できないこともないかもしれないが、片方が本気では年齢的に冗談では済まされないので全員で取り押さえる羽目に。

こついうときに頼りになるのが和茂。力づくで結城の体から引き剥がす。

もちろん俺の力など無いに等しいからこついうときは無力だ。相手への聞こえない罵倒と精神の安らぎだけしか与えられないのに、結城はそんなの必要としない。

「和兄、ちょっと抑えてて」
「了解」

瞳に怒りを宿した結城は和茂に秋光を羽交い絞めにするよう言った。

『あつ、ヤバイ』

和茂が秋光を羽交い絞めにして立ち上がる。制裁のときが来たときオレは思わず結城から離れた。

座ったままだった結城がフラフラと立ち上がると、そのまま秋光に急所蹴りという制裁を与えた。和茂は制裁の際に受けてしまった、とばっちりの痛みに顔を顰めながらその場に秋光を捨てる。

その間、全員が無言だった。秋光は強烈な痛みに声が出ないらしい。そのおかげで、蹴りの音がよく聞こえた。急所蹴って音がするって・・・大丈夫なのか・・・？

一連の行動を見ながらさやかが命令を下す。

「秋光、次はないからね。和茂、ななこ。しばらく結城と秋光を一緒にさせないで」

「イテエ・・・・・・了解」

「努力します」

「・・・っう（激痛）」

和茂とななこが呆れ顔で返事をした。その後ろで秋光は悶絶中である。

普通的女子中学生と比べれば有紗同様かなり力のある結城が全力で蹴ったのだ。痛くないはずがない。むしろ、気絶しておかしくないんじゃないか。

「この家のハプニングの中心はいつも男共ね。時間になったからもう行きましょ?」

溜息まじりのみさきの言葉には同感だ。

受験者の通学

みさきが通学用鞆を手に持つと、きりかとななこの分を渡す。和茂は秋光をちらりと見ながら自分の鞆と共に結城のを一緒に持った。

まだ痛むのだろう、よろよろと秋光は歩きながら自分の荷物を背負う。

結城はいまだにショックがあるのか、いつも以上にどす黒い不機嫌オーラを出しているが和茂に頭を軽く下げて感謝と謝罪の意だけを示した。

「ありがとう、和兄。後、ぶつけてごめん」

「ん、大丈夫」

そうして受験組は家を出る。オレは留守番したり、ついていたりとその日の気分で決めているが今日は朝だけはいようと思う。授業が始まったら邪魔になっってしまうから帰ろうと思うけど、せめて結城の傷を少しは癒してあげたい。

中学は、高校へ行く道の途中だ。普通の道を秋光中心に普通に話しながら、普通に歩いていく。が、今日はあんなことがあって今も秋光は静かだ。元気でもななことと和茂が近づかせなかっただろう。

中学校の前で結城は持つてもらった荷物を受け取って門をくぐる。その後ろを回復した秋光が追うと、またも蹴りを今度は腹に入れられてその場に蹲る。そのまま無視して結城は教室に向かう。その頃には先に来ていたるりこ達も朝練を終えて片付ける頃だ。

中学から更に歩けば、偏差値やや高めだが平凡な高校がある。そこまでの道のりは先ほどとは違い、口数がかなり減るらしい。うるさい秋光がいなかったために、話すことも人もないようだ。和茂が先に行くと、受験勉強で鈍ってしまう身体で制服のまま、荷物を持ったま

まで、全力疾走で走り去っていくのが後ろを振り向けば見える。きりかとみさきは少し歩くペースを速める。走らなくても遅刻はしないだろうが、余裕を持ちたがる2人は先ほどに比べると速く歩き始めた。

着く頃には翔平と恭助もきつと部活を終えて教室にいるだろう。

「ハア・・・」

『大丈夫？オレは授業始まったら帰るけど危険になったらすぐ逃げて』

「・・・頼りになる仲のいい味方は上の階のクラスしかいねえからなあ。先生だつて呆れて相手にしねえし」

『・・・（冷汗）』

「まっ、いつもどおりなんとかなるさ。フエイ、さっきはありがとう。嬉しかったよ」

全然興味が湧かない面倒な授業がもうすぐ始まるというのに結城は珍しく普通の笑顔を見せた。少しだけ、オレの存在意義が証明された気がした。

結城は少しだけ教室の窓を開けてオレの帰り道を用意してくれる。今朝は晴天、オレの心も晴天なり。

人口の減った家

明るいい空を飛んで家に帰ると、ちょうど大量の洗濯物を干し終えたかながレポートのためにも残りの家事をさやかにお願いして家を出たところだった。

慌ててドアの隙間めがけて全力で飛ぶ。

「いつてきます、よろしくね」

「わかってます。いつてらっしゃい」

ボタン、とドアを閉じられるが、滑り込みセーフ。普段結城が窓を網戸にして開けているのだが、オレにとっては結構重労働なんだ。あの網戸、最近ガタがきてるのか開きにくいんだ。今度結城に言っておかないと……。だんだん冷えてくるこの時期、家に入れないのはかなり嫌だ。

さて、何もすることがない……。

家にいるもう一人、さやかの仕事は買い物用のメモを書いておく事と食器を洗っておくことのようなのだ。

早々に食器を洗い終わると、冷蔵庫と床下収納庫を確認して必要なものを最低限書いておく。ちなみ達が無理なく持てる量にしておくところがとても優しくて。だ。値段もちゃんと考えて予算をたて、特売のチラシも数枚おいておく。ある程度の用意をしておけばちなみの天才的な頭による短時間の計算と、るりこの時間配分や注意力で自分たち以上の成果を挙げられることもある為、今日も期待大だ。

さやかも決して少ない期待をしながら用意を終えると、自分の勉強へと入る。

でも、やっぱり勉強は好きにはならないらしい。早めに切り上げると、最近始めた仕事に取り掛かっていた。

就寝時とは違う静けさはお昼寝にも室内冒険にも絶好なときである。
でも、今日は天気もいいから日当たりのいい場所でお昼寝したい。
結城の部屋から柔らかいオレ専用にと買ってくれたクッションを引
つ張り出して窓際で寝た。

次々と帰宅する受験生と中学生

うるさい朝と静かなお昼とは少し違い、夕方は日によって騒々しさが違う。

普段は姉がいるが今日はあいにく、留守になっている。

「ただいま」

「疲れた（ブツブツ）」

「確かに」

最初に帰宅するのは中学生の受験組。静かな家にななこの声が響いて俺は目を覚ます。その後ろで結城が面倒な授業に疲れて文句を言っているのに秋光が苦笑しているのが重なる。

どうやら学校でトラブルは起こさなかったようだ。しかも、和解したのだろう。クラスが違うのに3人で帰って着ている。

自室に荷物を置いて制服を脱ぐと各自が別の部屋で自分の勉強に集中する。ななこがりビングに降り、結城と秋光は自分の部屋にこもる。その為に、家はまた静かになる。

「ただいまあ」

「ただいま」

「ただいま」

しばらくして、静かな家のドアがまた開く。高校生の受験組が帰ってきたのだ。

こちらも自分達の部屋に入るとそのまま受験勉強を始めた。

オレは結城の邪魔にならないように家のあちこちをのんびり飛び回る。

しばらくして勉強に取り組んでいる静かな家のドアを騒々しく開け

るのは隆星。勢いよくドアを開けて靴を脱ぎ捨てる。

「ただいまあ！」

いつもならここで義姉の怒鳴り声が聞こえるのだが、今日は無音だ。そう珍しくもないことなので、隆星は気にせずそのまま2階へ走る。その間にりりこ・ちなみ・あんずが帰宅。

荷物を部屋に置いて即行（ものの数秒。慣れとはすごい）で制服から着替えるとりりこ・ちなみはさやかメモとお金を手に買い物へとまた出かけていつてしまった。ついていくことは叶わなかった。あんずはとりあえずやることもない上、姉の勉強の邪魔は固く禁じられている。義兄の邪魔は特に言われていないが、する気はないようだ。しかしあんずは禁じられている姉のもとへとむかった。隆星はその間に階段を上りきると自分の部屋へと突進。

「秋兄いいいゝー!!」

開いたままのドアを抜け、秋光の机へ猛ダッシュ。荷物は何時の間にかその辺に走りながら放り出していた。毎度思うがこいつはどんな育て方をされたのだ・・・？

弟は優しい長男が大好き

いつもはいるはずの秋光は部屋にいなかったようだ。だが、嫌な予感はないから結城のところではないだろう。

「あれ・・・？」

『トイレじゃん？』

声は聞こえていないだろうからオレと同じくトイレかと思った隆星が部屋を一度出る。

そこへちようど出てきたのは結城。不機嫌・・・いや、気色悪そうに部屋から出てきた結城は兄達の部屋を指差すと下へ降りていった。

「和兄、秋兄。いる？」

ひょいと隆星と同時に部屋を覗くと二人は見つかった。なぜか和茂に秋光が抱きついていたのだが、確かにそこにいた。

さつき結城が降りていったのは和茂のいる部屋へおそらく過去問の資料をもらいにいったのだろう。結城の事だから既にきりかやみさきのところには行っているだろう。それに、あの2人の部屋より人数の割りに広いこの部屋においている可能性が高い。男は女ほど物をいろいろ持たなさそうだし。

そうしてこの様子を目撃したからだと気付くと苦笑した。隆星と同じことを考えているのだ、この馬鹿^{あきみつ}は。

「和兄、秋兄、気持ち悪いから他所でやってよね。（溜息）きり姉、ちよつといい？」

階段を上って部屋を覗いたのはあんずだ。チラリと部屋の惨状を見

て溜息混じりにそう言うときりかとみさきのいる部屋へ入っていった。部屋から何か話し声が微かにだが聞こえてくる。

和茂は流石に10年以上も秋光にこう懷かれ続ければ対処の仕方は嫌でも覚えるだろう。

和茂は後ろにいる邪魔な人物を無視して受験勉強に励んでいた。構ってしまえば負けであるのはオレでも分かる。でも、実践できる自信はオレにはない。

秋光は秋光で無視されているのにご満悦顔でいるところがすごい。隆星だったら構って欲しくてひたすらちよっかいを出す。

ちよっとずれた所で秋光を尊敬してしまっているのだろう隆星は秋光と和茂に飛びついた。

「うおっ！」

まあ、結果は簡単だ。

中学生にもなればそれなりに体格が良くなってくる。その上隆星は運動神経が天才的で馬鹿だ。力加減など考えずにもうダッシュで飛びつく。当たり前前に和茂と秋光が前に押され、一番前にいる和茂が勉強机に頭を打つ。

「~~~~っ！」

強かに頭を打ったということとはやはり勢いが普通ではなかったようだ。

秋光は間一髪難を逃れていた。突然の事だったのに見事に要領よく安全な部分に移動している。

「痛いんだよ、隆！」

「俺はもう慣れちゃったよ、毎日こうだし」

「和兄だつて運動神経なくはないんだから頑張れ」

「だつてさ、和兄」

「ったく・・・頑張るしかないのか」

『そこは頑張りどころじゃないよお！』

馬鹿弟に頭を抱える馬鹿兄。馬鹿な遊びに付き合つ覚悟を決めた。

「やめさせるつて言う選択肢はないの？（呆）うるさいよ」

「こつちまで声聞こえるの」

きりかとみさきが文句を言おうとやってきていた。

優しい長男は美人双子姉とも仲良し

中の様子を見て溜息をついた2人。

この中の惨状を見れば普通の事だ。みさきは頭痛を感じるのか頭を抱えていた。姉同様義弟に呆れる毎日に少し慣れてしまったことに放って起きすぎたと反省があるのだろう。

反対にきりかはいつまでもうるさいが弟に素で懷かれている和茂に少しの羨ましさも感じているような目で見ていた。まともな愛を受けていたとはいえ、忙しそうな親や姉に甘えることはなかなかできずに弟妹の世話役になったきりか。みさきと一緒に実妹には好かれているだろうが、ここまで一緒に遊んだりする年でもない。ましてや受験前。こんなに気楽に和茂のようにできるほどきりかも楽天家ではない。

そんなきりかに気付いたのは和茂だった。

「隆、秋、ちよつと別の部屋行つてくれ。．．．きりか、ここ教えて」

和茂は2人が背から降りるのを待つて付箋の張つてあるページを開いてきりかを呼んだ。

「きりか、先に部屋戻つてるから」

事情を察したらしいみさきがそういい残して部屋の前から立ち去るのを見届けて和茂は引き出しを開けた。引き出しの中から何かを掴むと、きりかの前に出した。

「和？」

「流石にもうここはわかるつて。基礎だからな。．．．ほらよ」

付箋の貼ってあるページは基礎の部分。そこを開いたままひざの上に乗せると和茂はきりかに何かを握らせた。

きりかの手の中に入っていたのは小さな袋。いい香りがする淡い紫の袋はとてもきれいだっただ。和茂にはお世辞にも似合いそうの無い物。それも2つ。

「……………」

「まだ少し先だし、きりかもみさきも気楽にいった方がいいんじゃない？ぶっ倒れるよ（笑）」

「いや……励ましてくれるのは嬉しいけど……なんでこんな女の子っぽいのを持ってるの？」

「……結と秋と隆が誕生日にくれたんだ、嫌がらせ込みでだよ」

「なにそれ（笑）」

「嘘だよ。誕生日プレゼントと一緒にもらったんだよ。本当はあいづらがちよっと前に俺とお前らで喧嘩した後に気使って買ってくれたんだよ。これ渡して仲直りしろって。別に誕生日プレゼントはもらったよ」

それは、オレの記憶にも新しい。

結城がかなり不安そうな顔をしてたのも鮮烈だったから。

高校3年生3人は皆の安定剤

確かに和茂の誕生日の少し前、珍しく風邪でかんとさやか、ちなみとななこがダウンした。

休日の間は全ての家事と看病をほとんど和茂が一人でやっていた。

手伝うと言っていたきりか達受験組には一切手出しさせず。非受験組にも部活を優先させ、何も用がない人に少しずつ頼む程度だった。「いざというときは友達の親の工場に就職するから大丈夫だ。お前らが失敗するよりはマシなんだから・・・」

そう言った和茂にきりかとみさきにしては珍しく本気で怒った。

「受験勉強本格化のときに受験組全員で決めた『全員第一志望校合格!』はあんた提案でしょ!」

とみさきが始終大声で怒鳴ったり、

「こういうときこそ助け合うものでしょ」

と優しく諭してたきりかでさえも、手伝わせようとしなかった和茂に

「一人で全部抱え込むものじゃないわよ!」

と机をたたくほどの怒りを見せていた。

その間ずつと弟妹たちは有紗に誘導されて全員声の届きにくい部屋に行っていた。

その後はその喧嘩の騒ぎで目を覚ましたかんとさやか、本調子ではないもののもう大丈夫だと言ってまたいつもの家事に取り組んだことによつて收拾がついた。

それからまた3人は普通の状態に戻っていたが、弟妹には不安だったのだろう。

信頼のある長男が優しい2人と兄妹喧嘩するということが。

「フツ、結構考えてくれるんだね、お兄ちゃんの事」

「お前も後でちなみやるりに泣かれてただろ、みさきと一緒に焦ってたの知ってたぞ?」

「いつものことよ、お母さんもお父さんもいなくてかななたちにも構ってもらえなきゃ、私たちが見るしかなかったんだから。そうじやなくて、あの3人が・・・って思ったから」

「結は俺等3人の事が信頼できるしいっぱい話聞いてくれるから一番好きだつて言うし、秋と隆はきり姉とみさ姉はすごく信頼できるし優しい自慢の義姉ちゃんだつて笑うんだぜ？そういうのつて意外と喋るからな、皆。それ聞くのが好きなんじゃ俺、翔のシスコン笑えないよな。思いだしては勉強する手が止まるし」

落ち着く香りのする袋を見ながら和茂はケタケタと笑う。

弟妹に遊ばれる馬鹿なこの家の長男ではなく、時には長女も頼る優しい長男の顔を見せて笑った。

「うん、ありがと。でも、やっぱり就職の道があるからって勉強やらないのは駄目だからね？」

きりかも姉妹の中で一番の可憐な笑顔を見せた。大抵の異性ならイチコロなのだが、和茂は普通に受け止める。和茂にとって血は繋がっていなくとも自分の義妹であるとして区切りをしっかりとつけている。ときめく事はきつと一生無い。

「あの時は夜更かししてやったんだぜ。今だつてちゃんとやってるだろ？今日なんか可愛い（！？）弟たちを無視しながら」

「可愛いって思ってるなら手懷けておいて欲しいんだけどねえ？（黒笑）」

平和な空気がぶち壊しだあ！！

おとなしそうでも恐ろしい義姉

苦笑した和茂の声に重なったのは（冗談抜きで）音もなく帰宅していたさやか。ただ単に気付いていなかっただけかもしれないが、いきなり現れたかのように喋られると心臓に悪い。更にかけている眼鏡のレンズは光が反射していてこちらからは目が見えない。その状態で部屋の前で仁王立ちしながら笑みの形にしているのは恐ろしい。つたらありやしない。

今までの和やかムードが一気に消え、危険モードのサイレンが鳴りっぱなしになった。

「悪い、ちょっとトイ」

「隆がうるさいから黙らせてくれる？それと、秋と結はあれほど気をつけといてって言ったでしょ？」

和茂と共に逃げようとさやかの横をすり抜けようとして、阻まれた。そのままさやかは面倒事をあくまでにこやかに押しつけた。仕方なく和茂はそのまま階段へ向かった。

「確かに隆星は多少突き放しただけでも文句を言う。けど、今回は素直に降りたんだぜ？うるさくするとは思ってなかったんだ。秋光と結城は別々の部屋で勉強することになってる。というか、自分の勉強していれば気をつけるもなにもないだろう？・・・って言えばどんなにいいことか・・・（溜息）」

『さやか、怖いもんな・・・』

「それにどっから取り出したんだよ、あの昔の愛用ラケットは・・・」

『隠せる大きさじゃないのに・・・』

どこに隠していたのか、昔使っていた愛用のラケットを手に早く行けというかのようにドア枠を叩いている姿を見ればどんなにデカイ勇気も萎んでしまう。

従うのが一番の安全選択だった。

お使用組2人と高校生が帰宅

「ただいまあ」

「買ってきたよ！」

「すごく安かったんだよ」（喜々）

「ただいま。腹減った・・・さや姉へ早めにお願ひ」

買い物に行っていたるりことちなみがいつもより随分と早く部活か
ら帰った翔平と恭助と一緒に帰ってきた。

帰りが一緒になって荷物を乗せて貰ったのか、るりこにもちなみにも
も持っている荷物の推定重量に反比例して疲労の色がない。自分達の
の買い物に対する期待にこたえられたことを嬉しそうに報告する2
人を見て、後ろの兄2人が辛い部活や面倒な勉強で疲れた心を癒し
ている・・・翔平の口がだらしく開いているのがすごく笑えて
しょうがない。

やや遅れて・・・

「疲れたあ・・・ただいま」

かななも帰ってくる。

かなな帰宅と同時に受験組の強制（サボっている者もいるのだが）
勉強終了時刻を迎えた。各自自由に休んでも勉強してもよい時間にな
る。真面目に勉強しているのは汐見家の娘達だけだが・・・
あんずや喧嘩していた隆星や勉強に疲労困憊のななこ他、やること
がない暇人どもがたまつていつも賑やかになる。その輪に加わるこ
とは出来ないけれど入るのが大好きだ。

帰ってきた男2人も部屋に荷物を放り込み、リビングに入る。

るりことちなみは買った物をさやかに渡すと皆がいる輪の近くで腰
を下ろした。

「かなな姉、皿洗いしてるから少し休んでいいよ？そのうちるりこ達が料理は手伝ってくれるから」

「んゝ、じゃあ１０分だけ」

かななもさやかのかの気遣いにそう答えて椅子に座ってリビングの惨状を眺め始めた。

オレは結城の肩に乗って眺める。

リビングでの雑談

さつきさやかが差し向けた和茂が謝って隆星の機嫌を損ねているために、今はかなりうるさい。

「和兄のバカ！」

「隆、静かにしょ？」

「ちなみ、バカがうつる。こっちに行こう」

「バカは和兄だっ！」

「断じて違う！」

「隆、和兄はバカじゃないぞ」

「確かにそうだね・・・」

「恭・・・ななこ・・・」

「『超重度の大馬鹿野郎っていうんだよ（黒笑）』」

「ひでえー!!」

「おかしくない。まあ、一つ訂正すると、『100回転生しても治らない超重度の』だけど（黒笑）」

「翔・・・し（ひ）どい」

「秋、お前も同等だからな?（無表情）」

『結城ナイス!!』

「傍観者だった俺になんか飛び火来た!?!しかも無表情!?!」

「アッハッハッハッハ!!（爆笑）」

「「「「「「」」」」」」」

さい

して

あんずうる

から静かに

せえ

しろ「「

「「「「「」」」」」」

「絶対姉ちゃんや義兄ちゃん達の方がうるさいのに!?!」

「綺麗にハモツたね」

「やっぱなな姉も思った?」

「つつーか今あんず、姉ちゃんや兄ちゃん達って・・・自分の事兄として言ったよな? (怒)」

「・・・うつん (冷汗)」

「確かに。和兄・翔兄・秋兄・隆・恭兄・結姉(?)・・・るりこ・・・」

「

「冗談抜きで結は男じゃないかって思えるよ? その格好じゃ (呆)」

「仕方ないよ、結姉は紳士物とかサイズが合っちゃえば普通に着てるから」

「私も着てるけどね」

「ななこはまだボーイツシュっていう感じがあるからいいんだよ」

「結は女としての色気がないんだよ (溜息)」

『ごめん、フォローできないよ』

「黙れ、エロトマト兄 (とフェイ)」

「トマト兄、変態」

「いつも酷い言葉大量に浴びせるるりこが直球一本で来た! ?」

『結城、否定したほうがいいんじゃないの?・・・とりあえず見た目は女らしく成ちよ』

「変態がうつったか、フェイ (小声)」

結城に頭を指ではたかれた。周りから見ればこった肩をほぐすような動きに見えなくもないように動かしてごまかしているのが憎い。痛む頭をさすりながらふと後ろを見ると延々と続く話を聞きながら少し笑いをこぼすかんがいた。母親とも姉ともとれる慈愛の笑みを浮かべて。

神業的調理

時折見せるかななの慈愛の笑みは、普段の絶対服従せざるを得ないときとは正反対だ。

いつも家事や学業に疲れるかななの幸福のひと時。かななはこの家の母親の代わりを担う代わりに、この和やかなときを誰よりも幸せに感じているのだろう。

そのひと時を充分楽しんでまた家事に戻る。

「さやか、今日は何をつくらうか？」

「カレー。とサラダ。サラダは他にやらせて私達でカレー」

「あいよ、んじゃ、ちゃちゃっとやりますか」

この2人がする家事は神的だ。いつもオレの知識管理に使うコンピュータに記録を試みるのだが、いまだ成功したことはない。

かななは腕まくりをしながら包丁を取り出す。その包丁は男はもちろん、さやかも有紗も、溺愛しているちなみにさえも触らせない愛用の物（いつかそれを人に向けてるときがこないよう願う）である。スツと構えるその動きは無駄がない。まな板を片手で敷きながら刃の具合を確かめる。

「6・64725618754・・・今日は楽勝ね、さやか」

「わかってるわ」

なぜか不思議なモードに突入。おそらく、疲労によって一時的に壊れたか何かの暗号。俺はそうだと思う。だって、この2人の家事による負担はいつも多いと思うくらいあるからだ。

隣で大量の野菜を洗っていたさやかがかんなの呼びかけに応える。そこからは神的な連携が繰り出された。

さやかが洗い終えた野菜をまな板の上に乗せ、手を引いたその次の瞬間には刻まれ始めている。野菜嫌いの有紗やあんず、恭助や隆星のために食べやすい大きさを、かつ、具がないと文句の出ないぎりぎりの大きさを刻まれる。

そのスピードはだんだんと増していき、さやかもそれに合わせ始める。まな板に置いていては自分の指も刻まれかねないために、その動きは野菜を半分投げるような形で置いていく。その投げ方に雑さは微塵もない。的確にかんなの切りやすい位置に投げられている。かんなもヒートアップしていき、そのうちにさやかが投げ、空中にある状態のままでも刻み始める。

かんなの秘技の一つ、調理過程・浮遊切り（ただし、さやかの協力が必要 命名、オレ）だ。

全ての野菜を刻み終わるのを見届けたさやかは冷蔵庫からお肉を取り出すと、なべを使って炒め始める。その隣でかんなもまったく同じ量のお肉を取り出し、同じ大きさのなべで炒め始める。

一人で10人前を、合計20人前を作るのがこの家の平常だ。

サポートに有紗やちなみ、るりこなどが入るときもあるが、大抵はこうである。

それでも足りないと言句を言う結城と馬鹿達おかずせんそうさんかメンバーがいる為に、ここは残し禁止が鉄則。破ったものは1食抜き。また、おかわり権は家事貢献者の方が成績優秀者より高い。そのために奥野家は有紗以外はかなり低い。それでも食べれるのはやはりおかず戦争でかなり盗られる和茂や恭助があまりにも可哀そうだからと言いきりかやちなみの情けからだ。

着々と料理の過程が進み、残すところは煮込むのみとなった。

奥野家が協力することは滅多にない

他の皆はいまだリビングでワイワイギャイギャイやっている。

「少しは手伝え！馬鹿男子！！サラダ作れ！」

「・・・兄貴達だとつまみ食いされるだろ。さっきから腹減った言
ってばっかだしよ」

「私達がやる」

本日の命令は結城の一声で回避され、ななこときりかとみさきがやり始めた。

「ナイス、結城（小声）」

『ちよつと内容酷いけど』

「まあ、野菜嫌いがサラダのつまみ食いはしないだろうけど（小声）」

「

「・・・確かに俺野菜は嫌いだし（小声）」

「でも、ハムとかチーズは食うだろ？（小声）」

「うん、食う（小声）」

「今日ちなみ達が買ってきたのにそれらはなかったし、冷蔵庫にも
なかった（小声）」

「恭兄、それ本当？じゃあやつばやんなくて正解（小声）」

「おねえちゃん、あいつ等今日つまみ食いする気ゼロだよお！（叫

」

「「「「「あんず黙れ！！」「」「」「」

あんずの告げ口発動。すぐさま6人の反撃が一斉文句を浴びる。いつもの光景・・・というかさっきと同じ状況。

「しかたない・・・」

「面倒・・・」

翔平と恭助が立ち上がり、手伝おうと盛り付けをしているテーブルへと近づく。

恭助の証言どおり今日はハムやチーズはなく、野菜のみが盛られている。それも、2つの大皿に。

「恭兄、翔兄。もう終わったからいいよ」

「って言うかむしろ来ないで、特にトマ・・・じゃなかった、変態」

「今の流れで言うのは酷い・・・何もしてないのに（泣）」

『まだ言われてたか』

「だから2人ともこっち来ないで（怒）」

「変態兄貴・・・（笑）」

既に手伝うことは何もなかった。

ななこにあっちへ行けと言われてしまい、軽くショックを受けるのは重度のシスコン野郎の翔平。逆に恭助は喜んでいるのではとも思えるような笑みを浮かべて戻っていった。

可愛いちなみや美人なきりかとみさきに変な被害が被らないといいのだが・・・

「残念だったな、翔、恭。つまみ食いできなくて」

「つまみ食いはしない。ああいうのは馬鹿のを奪うのが面白いのに・・・」

「翔兄、弟を可愛いと思うなら少しくれたっていいだろう」

対照的な様子で戻ってきた翔平達はすぐにもとの輪に戻って喋り始めた。

汐見家のガールズトーク

奥野家の息子たち（一応一人、娘もいるが）の輪を見ながらなこが独り言のように呟く。

「なんで翔兄が学校で人気なんだろうね・・・よほど性格変えてるのかな？」

こんなに人がいれば当然話は繋がる。

突然のガールズトークにオレは興味を惹かれてそちらへと向かう。

「確かに和茂も結構モテるのよね、意外と」

「そういえば和も翔も私の友達には人気。って、何で翔が高校で人氣なのをなこが知ってるの？」

「・・・友達のお姉さんが翔義兄の事知りたから教えてって来たから。2、3回」

「ということは秋や結のどこにも来てるのかも（笑）」

「秋義兄と結義姉はお義兄ちゃんやお姉ちゃんのより自分のがかなりすごいよ」

「ちなみいつの間に・・・皆いるのね」

どうやら惹かれたのは俺だけではなかったようだ。るりこやあんずと共にちなみが入ってきた。

「よく秋義兄は告白されてるらしい・・・どこがいいんだか！（怒）」

「あんず、静かに。結義姉は見かけるたびにストーカー馬鹿に付きまとわれてる」

「・・・（冷汗）」

「もしかしくなくても・・・」

「察しの通りだと思う」

「えっ？誰？？」

「秋義兄。で、昼休みとかたまに隆が突っ込んで大騒ぎになる」

「先生が呆れちゃってもう最近じゃ誰も止めないんだよ（笑）」

「授業とか大丈夫なのかな？」

「結義姉が数少ない友達やなな姉に引っ張られて女子トイレに誘導される」

「流石に一般常識はあるみたいよ、入ったりはしない」

「入ったら当たり前前にマズイでしょ」

「うん、諦めて入り口で待ってるらしい」

『それもどうかと・・・』

「・・・（呆）」

「それも嫌ね」

全員が苦笑いをしていると、賑やかな雑談を絶対にやめざるをえないかなの声が響いた。

「できたから自分の持つてっぺん！」

食事の配膳だけは全員で

本日のメニューはカレーと野菜サラダ。それと一人コップ一杯の麦茶。

毎日そのときそのときのメニューに合わせて配膳の役割を分担している。

るりが大量のコップになみなみと麦茶を注ぎ、ちなみはスプーンと箸を配膳していく。

その2人の分のカレーはきりかとあんずが運んで、ななことみさきがかんたとさやかに分を運ぶ。両手に一皿ずつ持って運んでいるが、あんずだけは今にも落としそうで見えてはらはらする。

ちなみがサラダも皆のところ置きなおして、きりかがおかず戦争組みの分のサラダを運んでやる。

ななことみさきは調味料を選んでかけ始める。

おかず戦争組は翔平と秋光が代表して折りたたみの机を2つ並べて置くと、麦茶やサラダを取りに行く。

その2人の分を和茂と恭助が運び、隆星は自分のカレーとおかわり用のカレーを置く鍋敷きを持つてくる。

その後ろで結城がカレーと自分の好みの調味料を手に着く。

入れ違いにキッチンに入った和茂がかんながら大きなカレー鍋を受け取る。まだ熱いため、ちよつとメルヘンチックな鍋つかみを使っているのは見慣れてしまったが、まだちよつとギャップに笑う。

軽々運び終えて、準備が一段落した。

「いただきます」

全員が席についたのを見計らってかんなが箸（今日はスプーン）をとる。それを合図に全員が食べ始める。

オレはもちろん食べないのだが、朝食同様に参加する。結城と向か

い合わせの位置に座るが、奪われる心配のないサラダを無視してカ
レーに手をつけたということは結城の分は今日安全だろう。

夕食がうるさくなるのは必然

結城から見張りは大丈夫とアイコンタクトがあり、オレは存分に周囲の観察に入った。

「有紗のは別に盛ってあるから、全部食べていいわよ」

「やった、了解（嬉）」

「ちなみ、醤油」

「はい」

「あんず、福神漬け持ってきて」

「こっちも・・・2つ（笑）」

「兄ちゃんたちは自分で持ってきて！」

「また自分入れただろ！！」

「結、うるさい」

『2つのトコ突っ込むべきじゃん？』

「出た、かなな姉さんの必殺言葉」

「・・・ちよつと違う気がする」

「おかわりおわわい（モグモグ）」

「タイミング悪っ！最後まで言わせるよ・・・って口の中のを飛ばすなあ！（叫）」

「隆、行儀が悪い」

「食べるの速くない？」

「俺もう3杯目だけどね」

「秋！」

『はええ！！』

「って、もう鍋空かよっ！？」

「フン、それは俺が1杯につき1・5杯位入れたからさ！」

「・・・合計4人前（呆）」

「よく噛めと言ってるでしょ！」

「ええ、私ももう少し食べたかったのになあ」

「それ以上贅肉つけるのか、るり」

「そこまで太ってない!!」

「でも恭兄言ってたぜ。腹に贅肉ついたのか胸無くなったのかわからないけど、るりこの胸は目立たなくなってるって」

「馬鹿!言っない!」

「ブツ・・・!?」

『うわっ、カレーの雨(和茂の唾液雑じり)っ!!汚っ!!』

「和兄、汚い」

「わ・・・悪い、結」

『オレにはねえのかよ!!』

「フェイには無理だろ(小声)」

「なに顔赤くしてるの和!!」

「るりの覗いてる恭兄も想像して赤くなる和兄も最低」

「・・・和兄。るりはかなり幼児体型だから覗くならちなみのほうがいいよ」

「反省の色がないようだね、恭?」

『というかもう見たって認めてるし』

「かなな姉はいいよ。・・・私が徹底的に潰すから」

「・・・(冷汗)」

「さや姉、手伝う」

「ありがとう、るりこ」

「・・・ごちそうさま!!(逃走)」

「フツ・・・逃げられると思ってるのかしらねえ!!」

「ごちそうさま、地獄を見せなきゃね・・・」

「ああ、やつちゃった」

「戦場がここになる前に食べちゃったほうがいいよ、皆」
「そだね」

最後の一言に皆が頷いて皿を空にした。

バイト三昧の姉の様子が違う

自分の食器だけは必要最低限片付け、翔平が気を使って恭助のを、かなながさやかとりこの皿を片付けた。

今日の当番である隆星が面倒くさいと文句を言いながらも素直に風呂掃除に向かい、その間に受験組の勉強タイムが始まる。かななの監視下にあるために集中せざるをえない秋光や邪魔できないあんとが黙るため静かな時が流れる。聞こえるのは紙の上をペンが走る音と紙をめくる音。そしてさやか達から逃げる恭助の足音だけだ。

15分程度の食後休憩を終えたかなとちなみが2人で皿を洗い始めた頃、恭助の断末魔の叫びが聞こえたことは言うまでもない。冥福を祈るべきなのだろうが、正直さまあみろという気持ちだ。あんな可愛い2人を覗くなんて罰当たりな！！

戻ってきたさやかの眼鏡に僅かに赤い液体についていることは、誰も指摘しなかった。だって、知らぬが仏だし。そんなことまで観察したくない。

また、廊下で血を吐いて倒れている恭介を見つけたななが止めとばかりにスリッパを顔面にヒットさせているのを目撃した帰宅者Aも事情を察知して何も言わずに素通りしていった。

「ただいま」

「あら有紗、廊下のアレには動揺しないのね」

「だって、明らかに恭が悪かったんでしょ？それにあのマゾヒストはそれでもやめないから」

荷物を部屋においてリビングに入った有紗はさやかにしれっと返して誰も座っていないソファに倒れこんだ。今日もお仕事ご苦労様です。

いつもならここで疲労から就寝体勢に入るか不良スイッチが入るの

だが・・・

「ご機嫌だな、元極道姉貴が珍しく・・・」

『結城も思ってた？』

草臥れたクッションを両手で抱え、口元が笑みの形になっている有紗を皆が不振そうにチラ見している。仕事帰りにこんなご機嫌なことは今までにない。

しかし、心当たり（しかも的中）のある人がいた。

元不良の姉に恋人発覚

「姉貴・・・成人なりとと会ったのか？」

「うん、プチデート♪（幸）」

「成人先輩って・・・えっ（冷汗）」

和茂だった。

オレも成人といえば聞いたことがある。確か和茂の友人で2回ほどこの家に来てたはず。この家はこれ以上人数が増えろと大変なので、原則友達と呼んではいけない。それなのにこの家に来た理由・・・その理由は成人の家に他の友達と遊びに行ったら家にいた成人の姉に未成年なのに酒を飲まされて酔い潰れた和茂を送るためだ（つたはず）。かなりのイケメンな上にその後、事情をよく知らなかった姉たちが無言で飲酒にないして恐怖の制裁を下そうとしてたのを顔を真っ青にしながらも必死に止めていたという性格も文句なしの人だった。

だから2回目は特例で招待されて、更に特例、1泊という異例中の異例を汐見家・奥野家共に満場一致で許可された唯一の人物。

ここまでしか聞かなければ翔平が冷や汗を掻く理由はわからないだろう。

だが・・・

「成人って女性嫌いで汐見家しげみけ外出を余儀なくされた気がするんだけど」

さやかの言うとおり、成人は対女性恐怖症の持ち主だった。汐見家の娘8人は冷や汗の量が尋常ではないのでごゆっくり〜といいながら外出。有紗はバイトから5分ぐらいの入れ違いで帰ってきたはずで、出かけなかった。

「確か外出しようとしたのに男の子は大丈夫だからって言われたんだよな、結兄（嘲笑）」

「うるさい。語尾を協調するな、隆」

『ごめん結城、フォローできない』

「（無視）」

失言だった……。思わず言ってしまった

でもあの時は翔平と似たような服（和茂のお下がり）を着て、恭助に秋光と隆星と一緒にマジ喧嘩（手を出しているのは結城と隆星と秋光と超一方的）をしていれば女の子だと捉えようがない。

「対女性恐怖症の成人先輩が有紗姉さんと……。」

「……。有紗姉も結みに男だと思われてんじゃ？つま、結のほうがいいけど」

「朝の制裁を覚えてないのか、秋」

「潰すわよ、骨も残らず」

「マジで死ぬ、お前の告白はキモイだけだ（怒）」

本当に秋光は末期かもしれない。結城がこれ以上巻き込まれないように願いたい。

「まつ、いいや。風呂わいてるみたいだし行ってくるね。あんず、行くよ」

「……（薄笑）」

時間短縮のため風呂は2人もしくは3人がルール。入るペアと順番はほとんど決まっているからいつもと変わらない光景だ。

風呂の言葉に反応した恭助が静かに入ってきた。変態としか取れない薄笑いを浮かべながら音もなく入ってきた恭助に何人かが危険を

察知して気付いた。代表者はさやかだった。

「ほんと毎日毎日・・・まだ懲りてないのね、恭。いい加減にしなさい」

眼鏡をはずし、超戦闘モードになった。

につこりという効果音がつきそうな表情なのに、目がかなり怖い。更に黒いオーラを出している。

この場にいる全員が危険感知した。

ブラックノートが発動して傷を負わぬことはない

さやかは懷から小さな黒いノートを取り出すとおもむろに開く。

「さてと・・・可愛い後輩の妹からの情報♪高1になった奥野君、実は同じクラスのやさ」

「お願いだから言わないでええ!! (絶叫)」

「八坂美代ちゃんに片想い。友達にちやかされ」

「やめてー!!」めんなさい!!」(絶叫)

「ちやかされて、何を勘違いしたのかいきなり想いを暴露した」

「あああああああ！！（妨害）」

「暴露した奥野君は見事に玉砕。そのときの返事の言葉が」

「ああああああああああああああああああああ！！！」
太馬

[illegible][illegible]

「私、3年の奥野先輩のほうが好みなの。元気で明るくて真面目な人……。奥野君みたいに存在感が皆無な人は興味ないの。……」

以上、私の可愛い後輩の可愛い美人な妹八坂美代ちゃんからの情報でした♪」

「・・・しくしく（涙）」

さやか of ブラックノート、別名・言語兵器。年に一度見れるか見れないかの稀有な存在。（できれば見たくないのだが）今回は結構威力が弱めだ。最後の発言以外。

自分の恥ずかしい過去暴露。しかも玉碎、自分の兄（しかも他の人
たちから不評の方）が恋敵となれば恭助の傷はでかいだろう。だか
らか・・・

普通この言語兵器は外で発動することが多い。そのほかには親相手に発動する。親にばれたくない秘密もやっぱりあるだろう。

更に傍観してた全員に（珍しいことだよ）見事なまでに異口同音で妨害を止められれば味方が0だと認めざるを得なかった。

最悪な事故発生

ショックでマジ泣きしている恭助を全員が用済みと無視して話が続く。

「有紗姉、いつの間に付き合ってたんだろう？」

「さあ？」

「かな姉もさや姉も知らなかったんだ・・・」

「成人の友達から聞いたのだとまだ1ヶ月ちよいぐらいだと・・・」

「和兄！その話詳しく！！」

和茂の発言に反応したのは珍しくちなみだった。どうやら姉の恋愛がすごく気になっていた模様。まあ、他の姉は恋愛興味なさげな人や恋愛はしない人ばかりだからねえ。微笑ましいかもしれないけど・・・

「「「あつ、ちなみ！！」」」

ここ一番のタイミングで普段の運動音痴を感じさせないタツクル。もちろん和茂は油断していたから受け止められるわけがない。普段なら受け止められるかといわれると微妙だ。

危険を感知した秋光とななことるりこは止めようと手を伸ばしたり腰を浮かせているが、誰一人間に合ってなかった。

ゴンッ

「あいたっ！」

「つつっ！！！！」

ちなみ、和茂を押し倒すという非常事態発生……。事故でも事故じゃ済まされない気がする。しかも、後一步で唇重なるところだったという超最悪パターン。かなり鈍い音して和茂は後頭部強打、おまけにちなみに前頭部を頭突きされている。そのおかげで唇がずれただが……

嫉妬に狂う翔平と、ちなみが怪我したときの汐見家の鬼と化した姿が目につく。

「……」

『大丈夫か……？すごい音したよ』

「……（冷汗）」

『ていうか、和茂が動いてないんだけど』

「……（超冷汗）」

結城は冷汗の量が半端ない。他の皆もフリーズしてるし。ちなみの脳も状況判断に手間取ってる。

事故の結末は・・・

しばらくして、声を出したのはちなみだった

「・・・和兄、ごめんね」

「・・・痛い痛い痛い！！ちよつ、むりつ。・・・痛い痛い！！！！頼むからどいてくれえ！！」

とりあえず、ちなみは目に見える傷もなく無事だった。和茂がクツシヨンになっていたから、おでこを和茂の前頭部にぶつけたくらいだろう。

が、下敷きになっている和茂の急所にはちなみの膝が乗っており、更に退こうか傷がないかを見ようか迷うように上半身を揺すっているため・・・もう直視できない悲惨な状況としか見えない。

ちなみは見た目どりの体重だと思う。中2となればかなりとは言わずとも、重くなってくる。まあ、平均以下なのは確かだろうけど、身長平均以下だし。

「・・・この上打撲の責任はかわいそ過ぎるね」

「かなな姉、やめよう」

「本人がやっているのにする必要はないね」

「姉さんたちやる気だったの！？」

「どつちかというとちなみの過失じゃないの！？」

「あんずが出てきたら乗せてあげれば？使い物にならなくなるだろうけど」

「・・・あんずがうるさいだろうからやめておく」

流石に汐見家の娘たちも哀れんでいる。弱冠2名、更なる悲劇を考えているところはきつと空耳さ・・・

「男として・・・最悪だが、・・・捨てがたい!!」

「理解できない、恭兄」

「可愛いちなみにただで触れられるわけないでしょう（黒笑）」

「・・・翔兄、怖いよ」

『ねえ、結城。もしかして痛みで気絶から立ち直ったのかな?』
「かもな」

毎日何かしら起こるこの家はほんと、面白い。

3年間結城のそばにいてみてきたけど、退屈とは無縁なこの家がオレは大好きだ。

この家の風呂事情

有紗とあんずと交替で風呂にきりか・みさき、ちなみ・るりこ、かな・さやか、結城・ななこが（何人かはシャワーオンリーの人もいるが）入る。結城が中1の頃はたまに風呂についてって結城とななこの会話を聞いてたりしてたけど、流石に今は入る勇気がない。・興味ないって言うのもあるのは内緒だ。結城は無関心でもななこが少し怒りそう。

その間の男（というか恭助一人）は姉たちの監視下にいることを義務とされている。それでもいまだ懲りない恭助には呆れる。一ヶ月に2〜3回は強行突破しようとして死線をさまよう羽目になっている。

「流石に今日やったら本当に殺されるよ」

「恭兄、姉貴の体見て何が面白いんだよ？理解できねえ」

「・・・少しくらいお前は女の子に興味持とうな、隆？」

「風呂空いたから」

「もう冷めてつけどな」

ななここと結城の声かけに立ち上がるのは和茂と翔平。二人とも暑い風呂があまり好きじゃないとはいえ、全然温かくない風呂に何の不満もなく入れるのがすごい。残りの3人は文句言いながらも自分の体調考えないバカのため、全然風邪などひく様子がない。それに、結城やるりこ同様シャワーオンリーなのかもしれない。（るりこの知っているのは事故だから（冷汗）！）

この時間帯はくつろぎや勉強、読書に家事と個々の自由だが、結城はもっぱら自分の部屋に行く。オレがついて行くの前提で。

「フエイ」

『
は
あ
い
』

栄養補給中は誰にも邪魔されない

オレの一日一回の栄養補給だ。結城にしては丁寧に束ねているコードを解き、オレに端末を接続、もう一方をコンセントに突っ込んで数分放置。

この時間は結城も周りを気にせずにオレと喋れる。いつもオレに気づかない他人の目を気にして（気にさせたのは紛れもなくオレのだが）途中で無視をする。もしくはオレが話を切るため、この時間は貴重だ。

「まったく、ホント秋はどうすりやいいんだかな？」

「・・・（冷汗）」

ただ、今日は初っ端から会話が途絶えた。とりあえず、運良く話が繋がるのを願って口を開く。

「学校じゃ大丈夫だった？」

「今日はななこが由里に事情を話してくれたから学校じゃ何も起こらなかったんだけどな」

だんまりが答えじゃなくてよかった。

由里ってちなみの元気ハツラツバージョンの子だろうか？ちなみに見た目は似てるけど雰囲気の違いという表現のぴったりの女の子だ。

「そうそう。よく覚えてるな」

そりゃあ、ちなみはオレの究極の癒しキャラで、それに似てるのだから。覚えてないほうがおかしい。

「中身は駄目なんかい（ジト目）」

『いや、きつぱりしてていいけど、可憐さがいいなあ・・・あつ、言わないでよ』

「言ったらこっちが怒られる。いい奴なんだけどな、女らしくないの一言はタブーだ」

それ、さっき言ったオレの発言に肯定ということだね。多分由里って人も結城にだけは言われたくないと思う。

「うるせえ（苦笑）」

『だって、ほんとに結城って男みたいだなと思わないんだもん』

「名前もだしな」

『好きな人とかいないの？』

「残念ながら、興味ない・・・和兄みたいな頼りになる性格がいなとは思っけど」

『ちなみに秋光は？』

「そうだな・・・変人っぷりがなけりゃいい。アレはアレでいい奴じゃねえの？楽しそうだし」

ということとは、普通に女の子に接していれば好みだと解釈していいのだろうか・・・

「まあ、そうなりやそうだな・・・ほら、充電終わったぞ」

結城はコンセントを引っこ抜き、オレも自分に刺さっているものを引っこ抜き。結城はそれを丁寧に束ね直して元の場所におくと、受験生らしく勉強机に向かった。

邪魔をしてはいけないので、俺は朝早くに起きてしまった事もあって寝ることにした。・・・昼寝してたのに、なんて言わないでくれ。オレは人工知能を持った頭脳だが、生活リズムは幼稚園児、小学生

低学年レベルなんだ！！

オレ専用のクッションを取り出し、結城のベッドの横にある小さなオレ専用のスペース（見た目小物入れ）に眠る。

フェイの知らぬ時

もうすぐ日付が変わろうとしている頃に結城は勉強をきりあげる。既にななこは疲労のために眠ってしまった。当たり前前にフェイも夢の中にいる。

拾った当時は不思議な感覚・・・違和感のようなものがあつたが、今は大切な家族の一人だ。

「おやすみ」

クッションからずり落ちてるフェイを起こさないように手にとり、クッションの中央に乗せてやる。起きる様子はなく、だらしなく口を開けているフェイに小さく笑う。

勉強のためにつけていた小さな電気を消して結城は自分の布団にもぐりこみ、眠りについた。

本日もまた、この賑やかな家での一日が（いろいろあったものの）平和に終わった。

息抜きのためのお勉強

本日受験組専用息抜日。ただし、午後のみ。

普段の生活で充分息抜きできてるのではというツツコミはなしだ。なぜなら既にオレが結城にツツコンでデコピンくらったからだ。

結城によれば、「義姉の監視はされている側の精神的疲労は普段の生活じゃ少しもとれない上、増えている」そうだが・・・結城はオレの存在忘れるぐらい集中してんだよなあ。そりゃあ、もう尊敬できくらいに集中っぷり。

それでも、普段外出できない鬱憤を晴らせるという嬉しさを結城なりの顔一杯（傍から見たらいつもの不機嫌顔が直っただけの様な微妙な顔だが）に表す結城はちょっと見てて嬉しい。その午後のための分勉強しなきゃ駄目なのは苦痛だけどとか言いながらも、しっかりとやっている。

和茂もきりかもみさきもななこもちろん勉強中だ。いつも以上に真剣な雰囲気バシバシと来ている。

珍しく秋光も（ちゃっかり結城の隣に座って）静かに勉強している。しよっちゆうペンを持つ手が止まっては頭を抱えて後ろに付いている翔平にヘルプを頼んではいるが、ちゃんとやっている。

いつもはうるさい隆星とあんずも邪魔しない。なぜなら・・・

「・・・なの・・・次の3つから・・・1は・・・2も3も・・・うん、3つとも間違ってる」

「・・・である。・・・・・・選びなさい・・・答えは・・・約2」

2人とも隣の汐見家下4人の部屋で勉強中だからだ。

「あのね、あんず。正しいもの選ぶって書いてるのに3つとも間違ってるって事はないのよ？」

「隆・・・選択肢は1・2・3なのになんで「約」がつく？」

「1か2だと思ったから、真ん中の1、5を四捨五入（本気）」

「・・・答えは3なんだけど（呆）」

うーん、あの2人の未来がすごく不安だ。それに付き合っているかなと恭助がすごい。ついでに言おう、この2人が一緒なのもすごい。結構レアな組み合わせだ。

有紗とちなみとりこはさやかと共にかなの穴を埋めるべく家事の真っ最中だ。

そうして、午前中は過ぎていく。

嫌な色の雲が流れていたが・・・大丈夫だろうか？

息抜きのためのお勉強（後書き）

久しぶりの更新です。

この話が一区切り描ききるための時間が想ったより短かったのにびっくりです。

・・・いいのか受験生というツッコミを自分に行っている日々ですが、まあなんとかやっています。

へたっぴなのは変わりません（T□T）

また第1章同様に一区切りするまで毎日更新（8時に予約掲載入れています）します。

発端は午後の一言

「無理だな、これは」

「風邪ひくね」

心配どおり、雨。それも土砂降り。

高校生3人は既に諦めた。ななこも結城も眉を顰めて文句を言おうとしてたが諦めモードだ。

諦めていないのはただ一人。・・・勉強嫌いの秋光だ。

「・・・傘差せば出かけられ」

「風が半端ないじゃないね、濡れるわ」

「・・・レインコート・・・!」

「和兄のサイズはないと思う。数も多分足りないよ」

「そうだな。まあ、和兄と秋のいらないから、サイズでかいのをな
なと自分で着れば大丈夫だろうな」

「そうね、馬鹿は風邪ひかないって言うし」

「でも、これは流石に風邪ひくぞ・・・」

「軽く台風並みだし」

「うう・・・仕方ないか」

こんな雨、外出て3秒で全身ぐっしょりになる自信がある。

オレのサイズのレインコートなんてないしね。結城は裁縫できるか
知らないけれど、なんか不器用そうだから多分無理だろう。人形サ
イズのレインコートを義姉さんに作ってもらうのも義妹に頼むのも
無理だ。というか、あの年で人形興味持ってるなんて誤解させたら
多分結城の全てが逆転する。

だから、室内にいてくれたほうが面白い・・・と思う。

「室内ひじゅけんせいいるんならこの子達混じらせていい？」

「・・・何させる気なの？」

『中高生が混じった室内遊びって・・・なんだ？』

はつきり言っつて、何をやるつもりなんだ？

想像がまったくつかない。

「はい！！」

ここで手を上げるのは珍しくみさき。てつきりあんずか隆星か秋光、恭助あたりだと思ったのだが、この人だとはびっくりだ。

やけに目をキラキラさせてひじ伸ばして真っ直ぐに手を上げていた彼女は、今までで一番楽しそうに言葉を紡いだ。

「昨日有紗義姉の彼氏の話あったけど、みんなの恋愛聞きたい！！」

実は、この一言はとてつもない爆弾に思えた奴がそう多くはなかったんだ。

絶対服従の姉に逆らうときもある

この家の人の恋愛事情はオレも少しばかり気になっていたんだが・
・多分この一家のほとんどが興味ないと答えるだろうという想像が
すぐく現実的になってるのが実情だ。

だけど、今のみさきの発言に顔が引きつったり、肩が震えたりして
いる姿があちこちにある。もしかしたら今日はかなり新しい発見が
見れるのかもしれない。

「んじゃ、私とさやかは家事に」

「駄目だよ、義姉さん！」

「恭、気色悪いからやめて」

恭助の変な視線（と動き）はかんなの一発によって撃沈。でも、そ
の倒れた奥には新たな刺客がいた。

「私もかんな姉とさやか姉の話聞きたいなあ」

上2人が溺愛しているちなみの甘えと、姉思いのりこの少し黒い
けど可愛い絶妙な笑み。オレ、既にノックアウト。これで落ちない
なら頭の心配をするぞ！！

「・・・話すことないのに聞くのはちよつとね」

「私は聞かなくても知ってるから、遠慮するわ」

「かんな姉、昔付き合ってた人でもいいよ？」

「・・・さや義姉の相手、私は知ってるよ？ 恥ずかしいなら私がさ
や義姉の話してあげるよ」

「ちよつ、有紗！それは内緒って！！」

「ななこ！！わかった、話すから！！」

珍しく、上2人が軽くパニック起こしている。

こうしてかなとさやかも、ちょうど休みだった有紗も参加して全員での恋愛暴露会が始まった。

『・・・息抜きなのか？これ』

「放つとけ、フェイ」

『恋愛かぁ』

オレの恋愛経験はほぼないに等しい。旧ご主人様につくられた時一目惚れしたけど、あの性格で恐怖を埋め込まれて以来さっぱりだ。似ているかなや癒し系のちなみなど美人揃いのここでも、可愛いなあとは思っても恋心を抱くことはなかった。

そのことを結城には言わない。秘密を持ったっていいだろ？

『オレはよくわかんないなあ、知識として持ってるけど、感覚的にはさっぱり』

「フェイに初恋があったら昔のご主人様だろうな・・・大人な女の人が好きそうだ」

結城はオレが思っている以上にオレをわかっているようだ。嬉しいけど、ちょっとシヨックだ。

順番決め

広いリビングに円になって床に座り、お茶を全員に配られた。今回主催者のみさきが配り終えて座ると、隣に座っていたきりかが紙のくじを手持っていた。用意が早い。双子は相手の考えてることがわかるって本当なんだろうか・・・？

「きりか、ありがと。それじゃあ、皆引いて？」

ノリノリで引くのはりことちなみ、あんずと有紗に恭助、隆星。反対に躊躇しながら引くのはかなとさやかとななこ、翔平。和茂と秋光と結城はいつもと変わらず。残った2つのうち1つをみさきが引き、残りをきりかが引いた。

その後、全員での順番確認が行われ、席替えが開始した。
結果・・・

「あたしから、翔義兄、なな姉、きり姉、さや姉、恭義兄、かな姉、るり姉、隆、有紗義姉、みさき姉、ちなみ姉、和義兄、秋義兄、結義姉・・・だね！」

オレが一番気になっていたのは実は結城の恋愛話だ。ずっと一緒にいたのに誰かが好きだとか、誰かに好かれているとか言うことが今までなかった（秋光に好かれてるのはノーカウント）からだ。なんでだろう・・・兄弟（姉弟）愛だといえいいのに、そうは思えない。

「んーとね・・・今、あたしはね・・・」

いつのまにかトップバッターのあんずが話し始めていた。

あんずの恋のお相手

「あたしの好きな人は、秋義兄や隆とよく喋ってた2つ上のかっこいい先輩。だから、なな姉や結義姉、秋義兄の同級生でちなみ姉や瑠理姉や隆の先輩。翔義兄と恭義兄の後輩だから、きっと皆知ってるだろうな」

オレはよくわからないが、何人かはああ・・・と溜息をついていた。どうやらよくない人らしい。

「いつもお義兄ちゃんたちと喋ってて、結義姉もよく喋ってて、すごく羨ましかったんだあ」

翔平以下8人が溜息もしくは頭を抱えている。そんなことは気にせずにあんずはつらつらとその男の事を話している。

「いつも誰かと楽しそうにじゃれててね、しょっちゅう先生に怒られてるんだ。でも、いつも笑ってて、運動もできて、すごくかっこいいのっ!!」

ああ、あんずがいつも以上に興奮している。その様子に更に息をついている8人に、知らない6人が何かを悟ったようだ。オレも想像がつく。きっとありえない問題児だったり、実はすごく嫌われているとか。

「あんず、それって須藤?」

「うん、須藤先輩」

ななこの質問にニコニコ顔で答えつつ、何か問題でも?と言いたげ

な目で兄妹たちを見ている。その様子に何度目かの溜息をついた秋光が言った。

「須藤は生まれついでの子だ・・・あれは危ない」

「うん・・・」

「翔兄、秋たちが入部した初日に口説かれてたからね」

「ああ、あの真面目ぶってる翔が唯一起こした登校拒否の時の事？」

「そうだよ、須藤が一目惚れしたらしい」

「超拒絶してる翔兄を諦めて結に的変えたときは呆れたね」

「ななが女の子だっていつても認めなかったんだっけ？」

「・・・顔が好みなら秋のほうがいいだらうって言ったのに、この素気無さが・・・なんて言われた時は鳥肌総立ちだった」

「引退直前は秋義兄に一直線だったけど、何で諦めたの？」

「学校で秋義兄が結義姉に抱きついてんの見て、秋義兄ならわかってくれると思ったらいいんだ。須藤先輩が秋義兄と同性愛・・・って言うか結義姉について語ってたなら、以外に気が合ったらいい」

「いきなり、『ごめん、結城より秋光がいい』とか言い始めたなと思ったら標的変更されてて、すげえホッとしたな。秋が追われてるから自分も追われなかったし」

「あの数ヶ月、クラスも一緒だったからかなりしんどかった・・・」

「須藤先輩運動能力高いからね」

「アイツ、きつと向こうでも迷惑しかやってないだろ」

遠い目をしている秋光。・・・向こう？

「アメリカだっけ？向こうなら趣味会う奴は1人や2人いるんじゃない？何せ広いから」

「・・・この家に2人はいるだろ、同性愛者が」

「先輩最近いないなって思ってたら・・・転校してるの!？」

「そうだよ。さっ、次翔兄」

事実を知ってショックを受けているあんずを放置して、翔平に番が
まわされた。

翔平の恋愛は前途多難

「僕は・・・」

おそらく好きな人はいないと言おうとしたのだろうが、るりこや秋光や有紗の黒いオーラとさやかブラックノートに気付き、腹をくくってまた口を開いた。

「別にお付き合いしたいという気はないのですが、同じクラスのあの女の子がいいなとは思ってます」

そう簡素に言っ、お終いにしようとしていた翔平を、かななが許さなかった。

「2週間くらい前に一緒に雑貨屋さん入ってたあの子？」

「なっ!？」

「ツインテールでフワフワした感じで翔よりちょっと小さい子だったよね」

「ちっ、ちがいます!!あの子はクラスメイトで・・・!」

「かな義姉さん・・・そのツインテールって、耳の横で、腰まで届くちよつと茶髪？」

「そうそう、ななことちなみとるりこもいたときよね？」

「ああ、あのちなみに雰囲気に似てるロリっぽい人？」

「いたね、いかにもデートって感じでにやけてる翔義兄」

「にやけてないっ!!ちよ・・・ちよつと嬉しかったんだよ!!」

いつも和茂相手に黒い翔平とは想像もつかない慌てっぷり。どんどんと墓穴を掘っている姿に腹を抱えて笑っている家族一同も面白いが。

「あたしはその人覚えてないなあ。翔義兄がいたことも知らない」

「・・・きりか、その人って変態安藤の妹だよな？」

「・・・多分」

「あのキモ安藤に妹いたのか!？」

そして、翔平の好きな人を知ってる人は他にもいたようだ。ただし、和茂は別のところに一番びっくり。

「そうだよ。兄と違って妹は可愛いけど。後、ちなみとりこの学年にも一人」

「どんな人なの??」

「安藤は・・・まあ恭助みたいなのって考えればいいよ。その妹はよくわかんないけど」

「って、よく恭兄知ってたね。学年違うでしょ？」

「恭義兄は美人のチェック早いから」

ちょっと見て見たい。ちなみレベルなのか、もっと上なのか・・・性格もきつといいんだろうな。

「安藤さんのお姉ちゃん・・・超腐女子だよ」

「でも、結構腐女子ってこの世に多いから」

「・・・リアルのみを好んでるひとだけだね」

「翔はそう見えるから仲良くされてるんじゃない？」

「・・・(シヨック)」

前言撤回、ノーマルを望みます。

『でも、頑張れ』

ノーマルを望むけど、否定はしない。ちょっと応援しておこうと思う。

ななこの青春

ななこの番になり、場が静かになる。

「ハア……」

静かになってしまった場に居心地悪そうに身体を動かしたり、視線をあちこちに飛ばしている。

溜息をつくななこはとてつもなく言いにくそうに口を開いた。

「同じクラスに付き合ってる人がいるけど……特に何もしてない」

「今どのくらい、なな姉?!」

「相手かっこいい?!」

「皆が知ってる人?!」

「部活何?!」

「何で言ってくれなかったの!?!」

「何もしてないって何で!?!」

事実を言い切って、ちょっとホツとする暇もなくちなみやあんず、きりかやるりこ、かなやさやかまでもがななこに詰め寄った。ちよつと……いや、かなり怖い。

「だから言いたくなかったのに……黙秘する」

黙りこくってしまったななこに全員が無理強いをせずに諦めようとしたとき……

「去年からだよね、ななこが何か隠し始めたの。それってこのことか?」

秋光がななこに近寄ってボソツと囁いた。オレは耳元にこっそり寄っていったから辛うじて聞こえたけれど、意外に地獄耳を持っていた翔平が聞き逃していなかった。

「へえ・・・秋光は知ってるの？」

ニヤリと笑った翔平にビクツと肩を震わせて振り向いた秋光の口が引きつりながら言葉を紡ごうとしたとき・・・

——ヒュウツ

ななこの着ていたパーカーの紐がフードから引き抜かれ、秋光の首に巻かれていた。

一瞬の間に結び目を解き、よどみなく引っぱりぬいた後、目に見えぬ速さで綺麗に秋光の首に一回りさせて両端を手に巻きつけ、いつでも絞められるようにしてある。

「殺すよ、秋」

「・・・言いません」

「・・・聞きません」

おっそろしい笑顔を浮かべたななこに秋光と翔平はひたすら首を縦に振っていた。

その様子を見てななこは片手の紐をはずし、秋光の首を解放した。

その動作も鮮やかで、オレの脳裏に旧ご主人様の命を狙っていた暗^ア殺者^{サシン}が浮かんだ。あの時代のどの熟練の暗殺者^{アサシン}よりもすごい。素人なのか・・・この女。

ちなみに旧ご主人様を狙ってきた暗殺者^{アサシン}は一人残らず旧ご主人様を作った防犯装置に引っかけて、一人も傷一つ作る事できずに捕ま

っていた。更に、一人残らず危険な恐怖の実験の被験者になっていた事も思い出し、ちよつと吐き気がした。

「・・・でも、姉さんたちには後で話す」

ななこは先ほどまでの様子を消し、普通の女の子のような顔で頬を染めながらボソツと言った。

「・・・自分も知ってんだけどな（小声）」

『えっ！？』

「結構いい奴だった。」

きりかの淡い片想い

こうして、次のきりかに番が回った。

結構気になるところであり、結構想像しやすいところでもある。

「名前は絶対に言えないから伏せるけれど、かれこれ3、4年になる片想い相手がいます（照）」

そしてそれはオレの想像通りだった。

「私でさえ初耳なんだけど、それ」

だけど、みさきにはわかっていなかったようだ。

「うん、だってね、今までかっこいいとは思っても好きになったことはなかったもん」

「憧れ止まりだね」

「義姉さんの好きな人か・・・羨ましいぞ（嫉妬）」

「恭義兄、嫉妬なんて醜いよ」

「美人に3年以上も想われてんのに気付かない鈍い奴か・・・苦労してるんだな、きりか」

「・・・まあね」

微妙な空白がある辺り、ビンゴだ。

「フエイ（小声）」

『何？』

「何？じゃねえだろ・・・（小声）」

『エヘヘ、結城も気付いたんでしょ？』

「まあな（小声）」

結城がちらりと向けた視線の先には和茂。

きりかはただいま妹の質問攻めにあっている。姉は察したのか、質問はせずに微笑みながら眺めている。そっちに皆気が言っているから話せるのだが・・・

『最近どうも秋光がこっち見てる気がするんだよなあ』

「んなわけあるかよ・・・（小声）」

まあきつと、秋光の事だから結城の事見てるのが、実際はオレが少し被っているから、オレが見られているように見えてしまうだけなんだろうな。だって、この3年間秋光どころか、結城以外の全員がオレのこと見えてたことがないからな。

さやかの想い人

さやかの番、やっぱりさやは少し言いにくそうにしながらだが、言った。

「気になる人はいます・・・」

珍しく消えそうな声で言うさやか。少し顔が赤くなって、可愛さ2割増。

次の瞬間、弟妹たちがとまることなく話し始める。

「さあ、義姉さん！その人について話なさい（黒笑）」

「有紗姉、ちよつとその黒い笑みは怖いよ」

「でも、気になるなあ・・・」

「ちなみもそう思うよな？俺も気になるんだけどさや義姉」

「ええ・・・恭には言いたくない・・・」

「ほら、かなな姉も手伝ってよ！」

「えつ、ああ・・・まあ、気にならないといったら嘘になるけど」

「歯切れが悪いなあ・・・秋義兄、気にならない？」

「まあ、気になるけどな。一番気になる奴じゃねえし」

「つかえないなあ！翔義兄は？」

「いつもの仕返しもかねて聞きたいですけど・・・怖いので聞きません」

「教えたくないの！！」

かなりの大音量で叫び始めたさやかに、ひるむことなく攻防中。

「賑やかにやってんなあ」

「別に知ったところで何できるわけでもねえし」

「まあ、そうかもしれないけどよ……楽しそうにやってるのはいいことだろ」

「……そうだね」

「珍しくさや義姉相手に恭兄が優勢なのも珍しい」

『確かにねえ』

いつのまにかさや姉に詰め寄る有紗・みさき・恭助・ちなみ・るりこ・あんず。今一番喋ってるのは恭助だ。目がなんかすごい本気でちよつと怖い。

「絶対言わないっ！！次はあんたでしょ！早く話さない！！」

「言っまで言わない！（即答）」

どうやらまだしばらく続くようだ。

結城はいつもより不機嫌そうな目を3割歪め、秋光は暇そうに欠伸している。

「恭、諦めて言えよ」

「無理強いはよくないよ」

「同感」

その後15分以上、どちらも譲らずにいたが、とうとう和茂・かな・翔平の助け舟がでた

恭助はパス・・・だけど？

こうして、恭助に回った。

まだ不服そうに口を尖らせているが、男子高校生がやっていても可愛くない。

「俺は別に言う必要ないだろ、昨日このサド姉にばらされたんだから」

まあ、確かにそうだ。

そう何人かが納得している中、秋光と結城が珍しくこそそそと話している。耳うちを受け入れ、逆に耳打ちしている2人（というか結城）はちよつと不気味だ。

俺も聞くといって近づいたが、秋光は突然耳打ちをやめてしまったために、全然話が聞けなかった。

『何の話してたの？』

「恭助の好きな人の話だ（小声）」

「内緒だぞ・・・（小声）」

「ああ、悪い（小声）」

オレは気づいた。結城は他の人に気付かれないようずっと前を向いてたから気付かなかっただろうけど、秋光は今、明らかに俺の目を見て言った。ご丁寧に人差し指を立てて内緒だとかのよう唇に当てている。そのうえ・・・

『ウインクなんてキメエツ！！』

俺は男に興味はないっ！！確かにちよつと可愛い感じがするだろう

けど、全然俺にクルものはない！寒気に鳥肌が立つだけだ。頭が事象を拒否しようと動いている。・・・これがいつも結城が感じていたものかなとか考える余裕があったけどな。

というか・・・いつからこいつはオレが見えていた？他の人にも見えるようになったのか？

かななの元彼

「次、かなな姉だよ」

何事もなかったかのようにかななに話を要求した秋光。本当は見えてなかったんじゃないかと思うくらいに。

「昔付き合ってる人はいたけど、今は付き合ってる人も好きな人もないわよ」

「どんな人だったの？」

「そうねえ・・・」

そういつて周りを見回した後、ゆっくりと話し始めた。

「秋よりうんと頭がよくて」

「グサッ」

「隆よりずっと物分かりがよくて」

「グサッ」

「でもそれをはなにかけないし、翔よりもっと明るくて」

「グサッ」

「やることは和なんかみたいになかった」

「グサッ」

「恭なんかとは正反対以上だったなあ」

「グサッ」

男全員に言葉のナイフ。罵倒には慣れてるはずだろうに・・・。それだけ汐見家このいえの娘は強いのだろう。

「要するに、こんな弟たちとはかけ離れた違う人だったわけね」

「『グサグサッ』『グサグサッ』」

そこに止め、有紗実姉の一言。

「なーる」

「そういうこと」有紗わかつてるね」

「悪いけど、フォローはする気ないからな」

『結、実兄弟相手に言われてるんだからそこは啖呵きったほうがいい流れじゃないの？』

「期待して……はいないから」

「うん……」

「……ツンデレ希望だったのに……」

残念がるのは想像通り秋光と翔平、恭助だった。別に結城はツンデレってわけでもないんだけどなあ。

るりことちなみの恋人

「私は・・・まあ、今仲いい友達の一人が好きだよ。泉くん」

「ああ、陸上部のプリンス」

「・・・ええっ!!?」

「アレ、超イケメンじゃん!!」

「外見、性格、身体能力、知能、どこをとっても完璧の!?」

「へえ、そんな子いるんだ」

「うん」

「う・・・羨ましいッ!!」

「ほんとうちのシスコンバカとは大違いな子もいるもんね」

「有紗姉、そこでその発言はしないで・・・」

るりこの発言にいろいろと皆話している。アイドルみたいな奴を超見下すような人間なのに、珍しい。そう思ってるななこはびっくり、あんずは大騒ぎ。秋光までもが驚いてる。・・・一番は有紗の攻撃にあつた恭助と翔平だが。

「・・・泉先輩か。ちなみ義姉を無視してるり義姉に告ったって、辻先輩から聞いたぞ」

その2人に爆弾投下。犯人・・・隆星。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・そうだよつ（照）ついでに、ちなみはちなみで意中の辻に告られたよ。私の次の日」

「「!!!!!!」（ショック）」

肯定の言葉と更なる事実にはショックを隠しきれていない2人。もうこの2人、警察に捕まってしまえよ。・・・オレ？当たり前にはショックだよ！この天使と墮天使（小悪魔？）はずっと姉たちに護られながら生きてぐんだと思ってたさ！！

その頼りの姉たちは

「「「「「よかったじゃない（祝）」」」」」

「「おめでとさん（祝）」」

「「よかったね（祝）」」

異口同音に祝う。和茂や秋光、あんずや結城もしっかりと。

・・・皆大丈夫って思ってるならまあ・・・いいけどさ。翔平も恭助もあんまりショックを引きずってないようだし。

隆星は聞くまでもなく

続いて、隆星。

にんまりとした顔で隆星が口を開こうとするが、

「あゝあゝあゝもう聞かなくてもわかったから聞かないよ」

「そうだね、ななに同意するよ」

ななが右手で静止のポーズをする。

苦笑いを浮かべながらさやかも言った。

「私も遠慮するわ」

きりかなんか弱冠顔色が悪い。

「態度に全面でてるからね」

「そうだね、きり姉とるりに賛成」

るりこは軽侮の目で隆星を見、（・・・いや、睨んでいると言っベ
き目だ）ちなみも手を振って遠慮の意を示す。

「僕もパスします」

翔平は隆星から視線を逸らした。

「隆のお惚気は遠慮するよ」

「かなな姉、お惚気って変。パスなのは同意」

かななもあんずもパスした。

「普段嫌になるほど聞いてるからな。恭に教えてやれ」

「俺だって知ってるよ。・・・和兄も大変だな」

「私も聞かないわよ。っていうか、話すことを許さない」

助けを求めるかのように和茂に來た隆星の視線を恭助へと流し目でパス。

恭助は一瞬戸惑いながらまだパス宣言していない有紗に同じく流し目でパス。・・・和茂より数段キモイのは言うまでもない。

有紗は嫌悪モードMAXで威圧。瞬時に隆星は諦めた。

「自分もパス・・・秋、触るな」

『どさくさに紛れて結城に触るな!!』

「・・・だって俺、こんなときの隆は相手にしたくない。怖いんだもん。しつこいし」

「嘘つくな、気色悪い」

『全然平気な上に自分が話し手の権利奪うの知ってんだぞ!!』

「いや、バレた?・・・話は分かるがまた今度にしよう、隆」

結城が自分に来る前にと冷静にパス宣言。

その結城に怯えた振りして抱きつこうとする秋光。男の癖に嘔泣きとかホント鳥肌モノだ。気色悪いよ・・・、ホント。ちょ・・・ちよつとサマになってるのはムカつく。

ともかく、短時間で他14名の発言禁止がでた。満場一致で聞きたくないということで隆星はしぶしぶながらもその音声凶器の惚気を諦めた。

有紗の相手は将来有望

有紗姉の番。おそらく奥野家男子全員が一番気になっているのではないかと思う。

「成人先輩はかつこいいけどよ……」

「対女性恐怖症」

「浮気の心配がなくていいじゃない」

「少し話して、お昼誘ったら全然大丈夫だったよ？」

「……有紗姉、ほんとに男と間違われて」

「ないよ。キスしたから」

「……ああそうですか」

「いいなあ、有紗義姉」

「成人さんかつこいいもんね」

「成人の対女性恐怖症は姉貴が原因らしいしな」

「うわー俺らと一緒に」

「何か言った？恭」

「……スイマセン」

「恭兄、恐怖なんかかけらも持ってないだろ」

「たぶん虐められて悦んでる。……変態な性癖のほうに」

「結……（冷汗）」

「アハハハハハ」

なんか奥野家だけで盛り上がってます。汐見家の全員がまったく会話に入っていない。

さらになぜか怖いほどに笑顔。和茂は純粹に友達のことだからだろう。確信持って言える、和茂は恋愛に疎いから嫉妬なんかしない！おそらく秋光と隆星は成人の事（変な意味で）気に入ってるからだろうけど……なぜに恭助や翔平、結城まで？

「まともな男の人がやつと・・・!!」

ああ、そうですか。鈍感でバカでヘタレでも、ロリコン・シスコン・ブラコンの三拍子揃った奴でも、救いようのないエロでド変態でも、近親相姦の危険がある奴でも、生粋の同性愛者でもないまともな人ね・・・和茂は結構まともだと思うけど。

確かに対女性恐怖症も少しずつ直せば立派な人に・・・

『・・・恭助と翔平に言う資格はねえっ!!』

自覚がある秋光や隆星のほうはまだマシかもしれない。（直す気はなさそうだな）

みさきの憧れ

お次はみさき姉。

「私ね、近所に住んでいる鹿嶋のお兄さんが好きなの。憧れに近いけど」

「やっぱお兄ちゃんのほう？」

「いや、年離れすぎでしょ」

「でも正直弟のほうキモイじゃん」

「こら、あんず」

『誰？』

「昔かな義姉の男兄弟的存在だった人か」

「鹿嶋のお兄さん（弟）は私と同じ年よね」

「さや姉今年で20でしょ」

「違う違う、鹿嶋のお兄さん（兄）のほうだよ」

「お兄さんのほうは今年いくつ？」

「20後半だよね」

「私の7つ上」

「10歳差か」

「でもみさ姉結婚できる年にはなってるじゃん」

「和兄も今年でだね」

「そうね、きりかもみさきも過ぎてるのよね」

いきなり秋光が話のハンドルを和茂のほうへ回した。そこに有紗が同調。

「まだする気ないって。大学行くしよ」

「結婚するよりこっちでみんなの面倒見ないといけないしね」

「今は受験勉強ばっかだけどね・・・」

3人とも苦笑い。兄弟姉妹の中で精神的に一番頼られている人たちだ。いなくなれると全員が困る。いつもいつも迷惑をかけている。それでも幸せを願っている。

小休止 汐見家の娘の将来

それでも幸せを願っているみんな。
だが、一番思うのは・・・

「娘溺愛してる汐見のおじさん、絶対許さなさそうだな・・・」

「目に浮かぶね、かしこまつてる鹿嶋のあんちゃんを威圧してる光景が」

「そうね・・・普段会えないのに余計会えなくさせるのが貴様！！
って怒りそう」

「お母さんは普通に許しそうね」

「二つ返事で、ああそう。いいんじゃないの？ってね」

「わかるわかる」

「よほど酷い人じゃなければ許すだろうね」

「でも、絶対お父さん止めずに見てるだけだよ」

「いろいろ怒鳴ってる横であらあとか言いながらなんか食べてそう」

「どうしようって考えてるみさ姉とかに」

「一口食べる？」

『ああ、わかる気がする・・・』

「よく太らないよね、母さん」

「あんず以外は全員細えだろ」

「ヒッドーい！！痩せたんだよ！これでも」

「元が赤ちゃん体型だからな。ようやく幼児体型」

「隆・・・」

「奥野のおじさんも許しそう」

「放任主義がモットーだっていつも言ってたし」

「ああ、でも翔兄は絶対手放さそう」

「キモイぐらいに、翔くくんって帰ってくるたびやられてたしね」

「和と恭だつてやられてたのに、翔だけ異常だつたわね。そういえば」

「父さんがやるとキモイ」

「母さんがやるよりかいいいけど・・・いつまでも幼児扱いされるのはなぜ・・・」

おそらく、年齢のわりに小さいからだと思われる。でも、確かに・・・その光景は翔平だけすごく異常なくらいに抱きしめている。後、全然抵抗していないから。

『ついでに、マザコンも追加されたんじゃない？』

何、この人。普通の顔してブラコンシスコン+マザコンの詰め合わせ。家族大好きなのかも知れないけど・・・奥野家の男子は変人率高すぎだ。結城が女でよかった。

小休止 またも秋光の問題発言

話はまだまだ続く。

「母さんは有紗に大学行かないなら早く嫁げって言ってるよね」

「アレはちよつとうんざりだわ。16になってすぐ結婚話とか・・・
どんな親よ」

「・・・ってことは来年から結も言われるんじゃない？」

「ゲツ、そういえば・・・でも、しばらくは学業専念だし」

「有義姉、その頃全然勉強する気なかったからじゃない？」

「・・・しばらくは学業専念だし、大丈夫かな・・・？」

「ならいいんだけどな」

「大丈夫だよ、結」

嫌な予感を察知。また秋光の変な発げ・・・

「後2年もすれば俺も結婚できる年になるから・・・ね」

『後2年も何もあるかあ！！』

「ね、じゃねえよ！！」

本当に秋光はそろそろヤバイんじゃないってレベルをとくに超しているのではないかと思う。双子の姉弟なのをわかっていないんじゃないか。

「秋・・・常識と法律の勉強してこい」

「だいじょーぶ、書類上ではできなくても心ですか」

「結婚は本当そのころに好きな人に言うものだ、常識欠如馬鹿」

「それが結だか」

「全力で拒否する。高校卒業したらこの家でていくからな」

「お金な」

「働きやいい」

「ああ、でもどうしても出て行きたいんだったら一緒に住」

「ふざけんな。てめえじゃ行けない国立のトップ校辺り行ってやる」

「結に追いつくようやるよ？愛のちか」

「無理、キモイ、いらねえ」

「・・・無理なら近場選んでもーし」

「詩穂に相談して詩穂の家に居候する」

すごい。さつきから秋光に最後まで喋らせないでいる・・・！！
というか、回りの兄弟が入れない超早口。オレも口をはさめない。

「・・・新井田は嫌だ」

「秋義兄のこの考えはどうやったら出てくるんだろうね」

「知りたくない」

「次、ちなみだよ」

結城の友人の名前が出て、秋光が蒼くなつた隙にちなみにまわされる。

結城の女の友人は揃って秋光の苦手な人なのだ。詩穂とはその中では随分マシなほうだが、秋光よりも結城を理解し、秋光から簡単に結城を奪える凄腕の人だ。感や運が強く、結城が一番困ったときに出てくる不思議な奴だ。多分、結城が詩穂の家に言ったら秋光がどんなに頑張っても毎日通ってもすれ違いになるだろう。

・・・ストーカーしかねないけどな、コイツは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9018u/>

フェイの賑やか家族観察

2011年10月26日09時07分発行